

保存用
永久保存

3.1-3

2

都立松原高校図書館蔵書

	No. S - 56
東京都立松原高等学校図書館	

504



目次

卷頭の辞 校長 沢野次郎

特別寄稿 (2)

自由ということ 大和久鈴江
乞 食 石井健吉

文苑

詩・歌 (4)

福沢 漱子 仲秀 子九 山恭 子裕
松井 セ ツ 吉野 幸 馬場 史
竹内 直 玖島 成 川 晃
松田 和 高瀬 志 船越 千
北田 宏 竹内 公 久保 幹 男

隨想 (13)

川本 弘子 島方 札子 山本 文子 子
丸山 恭 今太 川正 岩田 弘務
布川 多 鈴田 幸 間 喜美
安達 恒 西木 昌 篠崎 朝
木村 種 長谷 川 田 井 君
遠賀 十 松本 幸 石 中
敦原 康 八 澤 孝 田 中 明

創作 (35)

「秋」 福沢 漱子
「晩秋」 石塚 千秋

職員及び卒業生住所録 (41)

編集後記 (44)

(表紙・馬場 裕)

卷頭の辞

校長

沢野次郎

「巻頭の辞」と事改めて題を書きますと、何となく四角張った感が致しますが、実は題がない為と編集顧問の先生から何か「巻頭の辞を」と云われたそれにヒントを得てそのまま題とした訳です。「るくる」第二号が出ると云う事は前から聞いて居りましたが、自分の様な時間的余裕のない者は、何時原稿を引受けても間に合う事は困難であります。今度は新入一年の志望願書提出前に發行と聞きましたので、大いに学校の宣伝を書こうと思つて居りました。

最早願書の締切も済みますので、後からの宣伝も面白いと思ひます。今年は余り宣伝しなくとも志願書が非常に多いので、事務の方は大多忙であります。今は色々なものが冬枯れと云う季節であります。来るべき春は、希望に満ちた元氣一杯の本校に与えられた準備の時であります。また校舎が建つてから此の場所では春を味わつて居りませんので、如何に本校の位置が好く、又春景色の程が想像されます。或は待つ間もなく春になつてしまふでしょう。本校の発展は春を期して目覚ましいものが現われることと思ひます。校舎の増築落成、生徒の増加、先生の増員、何れも希望に輝くものばかり、勿論今迄にも何回か発表致しました様に、此の地を定めた事が、本校随一の第一条件であります。色々な点で恵まれて居りますが、今後は施設の面で大いに力を注ぐ必要があります。此の点は父兄の御後援を願わなければなりません。内容の充実、特に教科学習の効果

は、教員と生徒の協力に俟たなければなりません。日頃の努力が実を結んで、是非発表の機会、又外部への公表もあつて欲しいと思ひます。その自信が本校をして、社会に認識させる一助となります。明るい、新しい校舎の建つた事は、世間に相当の話題を投げましたが、他の学校でも相当に関心を持つて居ります。最近本校も、出品入賞、或は表彰等と、次々に飛躍を物語つて居ります。これは正に本校発展の前奏曲であります。併せて「るくる」第二号の發行は、是又、前に述べました発表の産物であり、飛躍第二号の結晶であります。再び第三号の發行迄の歩みが堅実であつて、一層の良きものが出来る様期待して居ります。

努力の連続は、必ず良い鎖の完成を見ます。本校の歴史も是非斯くありたいと、念願致します。私の考えは、最初校舎さえ造ればよい、一にも校舎、二にも校舎であつたが、最近の心算は、校舎以上の大きなもので一杯であります。一度に全部はむづかしい事であつて、段々片附けて行く予定であります。直ちに理想の実現は困難であります。運動場の整備も、春になれば一段と目立つと思ひます。芸能文芸方面にも十分の特長を生かしてもらひ度いと思ひます。「るくる」第二号發行に就いて愚言を呈します。

隨想 自由といふこと

教諭 大和久鈴江

自由 (liberty) とか自由主義 (liberalism) とかという言葉は、非常に広範に、又多義的に使われている。例えば自由経済、自由思想、自由宗教、政治的自由主義、新自由主義等々、それこそ自由という言葉が実に自由自在に用いられている。がさて自由とは一体どういうことかと穿きかしてみると、案外この語義には明確な一義性がない。この言葉の定義は頗るあいまいなのである。哲学辞典によると自由の定義を次のように説明している。即ち「強制的反対、消極的には外的拘束より独立なること、積極的には自己の本性に従ふ意」とある。しかしこれでは余り抽象的で自由の真の意義がはつきり把握出来ないような気がする。

近頃世間で大分やかましく云われ、私自身も頻りにそう感じている「戦後人々の多くは自由ということを実に自分だけに都合よく解釈しすぎ、又その解釈を行動に平気で移している」という叫びの根本的な批判をもし、自らも反省しようとする時、一層自由というものの本体が追求されてくる。

ところがこの「自由」ということを語義的 (semantically) にしらべてみた場合、ある程度具体的に——実践的にこの言葉の解釈が下

し得るのではなからうか。遠く印度、ギリシャの昔に於てはこの「自由」という語ははつきりした一義性をもち、相当具体的に使われていたこともあるが、その後哲学者たちが敢て抽象化してしまつたところに、前記の哲学辞典にあらわれたあいまい性が生じたものらしい。近く十七・八世紀、歐米で盛に叫ばれた自由主義もやはり政治的色彩の強い抽象的なものであり、明治時代の日本のそれも歐米のこれを鵜呑みにしたものであつた。この鵜呑みのままの自由、自由主義が現在にまで我國の社会に用いられ、ひいてはこれが当世流行の民主主義と結びついて「自由」ということは自分の意のままに振舞ふこと、「他人はさておき自己第一主義」という勝手な解釈が家庭に於て、学校に於て、道路に於て、車中に於て人々の眉をひそめさせる結果となつてあらわれるのではあるまいか。

語義的意義からみた本来の「自由」とはラテン語の *libertatem* 即ち *de loved, gentlemenhip* ということであり、free と同意義となる。つまり自由ということは語義的から次のような定義がつけられる。即ち「一人の人の自分自身を愛する心が、他人にも同じような愛を及ぼし、しかもそれが紳士的な礼儀を以つてなされること」。これが真の自由の意義だとすると、自分を愛すると同時に他人にも同じような愛を以つて、しかも礼儀を以つて対さねば真の自由人ではないのである。常に私が生徒諸君に「他人の身になつて考えよ」というのはつまり「真の自由人たれよ」ということにはかならぬのである。

ところで *gentlemenhip* ということは *citizenship* と同意義だそうである。かく論ずると *free = civil* ともなる。civil の相互関係から出

来た一団体が *city* であるが故に、真の自由を解し、この解釈に基づいて行動する態度がいわゆる市民的態度なのである。一人の人の態度を評價する条件の中に近頃この市民的態度という一項がうたわれているのは、つまり真の自由を解し紳士的に振舞えるか否かの尺度を示すものであつて、市民的態度なる語は実に *citizenship* の直積なのである。 *gentlemenhip* とせず、これを *citizenship* まづもつてきて市民的態度という項目にしたところは、いささか自由とピンと結びつかない憾もあるが、これは釈語の自由さ、抽象的という特性のあらわれかも知れない。とまれ「自分を愛すると同時に他人にも同じ愛をもつて、而も紳士的な礼儀をもつて対すること、これを真の自由という」という自由の解釈に私は安んじたいのである。

前号「る・くーる」に掲載せられたM来生の隨筆「自由の発見」をよんで大いに共鳴したので旧稿の塵を払つて今回寄稿の責を果させて頂き、あわせてこの拙い文を卒業生への貧しいおくりものとしたと願ひつ。

(一九・三・一・一七)

乞食

教諭 石井健吉

春のひかりに影なして
うなじきたなきかいたいらの
生の壺より水もりて
むれや、潰えたるまちゆけば
欠けし、やぶれしもののおと
うちし、うたれしこえのなみ
洞にはあらぬ青空に
うつろにひびくわびしさや。

われもころものあかしみて
きみもひたいに霜置きて
つまも愛な兒もほはやせて
春のひかりに影なして
生の壺より水もりて
かけし、やぶれしもののおと
うちし、うたれしこえのな
さまよいありくかなしさや。

(一九四九年四月作)



文苑

詩歌

きのこ

三A 福沢淑子

森の奥の、うすら寒い湿地に
太陽の恩恵からさえはなれて
ぼこぼこと頭をもたげた
私はきのこ。

灰色の無機質のかたまりの
私の菌柄が

それでも手を一杯にひろげようとあせる時。
見上げる高い木の梢を夕風が渡り
ここまでは全くもれて来る事もない光が
その幹を赤く染めているのを見るのです。

何かを考え出そうとしている
そしてこの静けさを
奪い一瞬間をかみしめ味い乍ら……。

落葉

三A 丸山恭子

夜の落葉が
かさかさとして散っています
物悲しい秋の足音です
まるで這い寄る様な
白すくめの冬の影なのです。

よめめく落葉は
かなしそうに俯向いて散っています
もつと生きて、もつと生きて——
まるでそう云っている様な——
死んで行く木の葉の声なのです。

夜のとはりが
軽いヴェールをおろします
もうお別れなのです
毎日の勤めの様な
師走の落葉の言葉なのです。

そして又

細い細い、そのくせ鈍感きわまりない菌糸が
私のこの無感覚な肉体を支えようと
朽ちた松の木を這いまわる時

私はひとり郷愁におそわれてみもたえるのです。

生れることも、死ぬ事も知らず

私の知っているのは、ただ

ここにこうしてあるということだけ

陰鬱な空間の一隅に

落葉に埋まって生を持つ

暗い情緒の化身

私はきのこです。

静かな夜の思い

三A 仲秀子

この瞬間

それはなんと尊いのだろう

父母も弟も皆

寝しすまつたこの時

私は一人でペンを走らしている

ペンの先をじつと見つめて

楓

三B 松井セツ子

私はコツコツと軽い靴の音を響かせながら一人散歩を続けていた
誰一人として通る者はなく寂しい並木の夕暮れだった

ふと立止った私の目に、楓の老樹が寒そうに身をふるわせていた
しかし楓の張り上げた枝葉は、さながら最後の錦を飾るかの様に
美しかった

私は、この年老いた楓の樹を見た時、幾星霜の変化多い歴史を
闘争に明け暮れて今さらそれをやめぬこの老樹の生命力の強さ
に打たれたのである。

私はこの老楓から受けた深い感銘を、そのまま胸に宿し感傷に
ひたりながら静かに散歩を続けた——。

心の故郷

三B 吉野幸子

訪れる度毎に変つていく

この静かな町

商人の家並も増して

かけ声も新しい

磯の香りのこの町に

生々しい木の香りをただよわせ

新しい屋根はつづく

家は増し新しい屋根はつづいても

姫松をゆるがし育くむ

磯の香と

私達を優しく包む人の心は

私の永遠の心の故郷であらう。



秋

二A 馬場 裕

何時しか九月も過ぎ

秋風が吹いている。

野にはすすきが咲き

山はもみじになつたけれど

私は何か淋しさを、覆う事が出来ない。

又この秋が廻つて来たのだ

異国に父と別れても

異国は戦火に鎖されても

幾度か秋は廻つて来た。

楽しかった秋

どこまでも続く

どこまでも

感傷と

はつらつさとの調和

それが秋なのさ

一D 玖島 成一

○落葉たき、通りすがりの子もあたり

○つめたさの、しみ込む足袋の破れ穴

透明な絲

二A 宮川 晃史

秋に

でも太陽は傾いている

かくれた紐が曳くような

そんな

不思議な焦りを看破して

旅芸人が見棄めている。

チンチン芝居をうちながら

旅芸人が太鼓でもつて歩きふれると

みんなそろつて山に行つたつけ
ああ、そうそう

柿の木を折つておこられたつけ……。

今となつては、それ等の想い出は

只、夢として残るのみ

永遠の夢……

又とあんな楽しい事はないだろう。

だつて、父はもう帰つて来ないのだから。

又、今年も淋しい秋がやつて来た。

秋 思

二A 竹内 直彦

ひらひらと

木の葉の落ちる様に

私の心にも

感傷的、ロマンチックな

思ひ出の木の葉が

高く青くのびた空

その中に立てる塔の様に

はてしなき喜び

みるみる集つた貧乏小屋に

子供の表情ばかりが背伸びする。

古煙管をはすかいくわえて

紫がかつた煙をはくと

その多くの輪の中に

内儀さんの死んだ後

又
辛うな表情をした太陽を想い出す。

不安にそそのか

されてからの

二A 宮川 晃史

大都會のと真中の路が

赤青だんだらの砦に邪魔されながら

当の音から僕はあの傍に立つている

神経衰弱か、脳溢血にでもなりそうな気がしながら

何でも十幾年か前には

宮城の堀割にもさかなが住んで

葉緑素が充滿していたのだが

何時のまにか、全然知らない間に

チンチン電車が高速の無軌道車に
拘り替えられてしまった。

一幅の風景画のように坐つていた景色が
射的場のダルマのように
どんどん消えて行くように思つた時
誰かが、タイム・ウオッチを僕に握らせたのだ
意地悪な、だが、博識の奴が。

それでも

どんなに目まぐるしくとも

何百万燭光が僕の鼻先から照らしても

僕は

その「不安」という奴を

無言の内、静かに手をさしのべて

受取るのだ。

濁流

二B 松田和興

ああ目が見えない

息の根が止りそうだ

自己の才能の貧しさが判つていても

腐つた鰻の様な頭では

折りて胸にさそうとすれば

花は悲しむのか、風にゆれる

「折られて、しほむのが私の運命なのか」

とても云うように――。

ひまわりの花が太陽に向つて

笑つていた。

黄金のかんむりをかぶり

背のびをしながら小さい花たちに

「どうですか、あの太陽とお話する事が

貴方達には出来ますか」

とても云うように――。

すすきが風と一緒に遊んでいた

月見草が月と話していた

星の瞳に似た露が

夜の世界に淡い灯をかかげていた

「北風の足音が近づいてくるわ」

とても云うように――。

みにくい物をかくした銀世界に

ぼつかりと黄色い花を咲かせた福寿草

まだ眠っている水仙にささやいていた

「ほら、もう起きなさい。子供も鳥も

花の馬車を待つていますよ」

どうすることも出来ず

只――

時の流れに身を任せているにすぎない。

これではいけない！

このままでは地獄の「はきだめ」の中に

捨てられてしまう。

何かにしつかりとしがみついて

生きて行かなければならない。

たとえ――、それが小さく

無益な「わらくず」でも

何でもいい

何でもいいんだ

円形の土塊が二つに割れて

冷酷な吹雪が吹きまくっている現在では

それより他に救われる道はないのだろうか？……

濁世の激流から逃れる道は？

四季

二B 高瀬志津子

緑の風が吹いた時

ふと野辺に見つけた可憐な花

紫に勾う

小川もつぶやいていた

「又、お友達がふえるぞ」

とても云う様に――。

満月の夜

二B 船越千枝子

人家は夜のとはりにつつまれた頃

老人は一人とぼと歩いていた

月の光はさむぎむと道を白くてらしている

この寒い晩に

何をしているのだろうか……

老人の顔は月光に冷たく青白くさえ見えた

何を考え何をしようとしているのか

ゆく先もない流浪の人の様に……

ただ黙々と歩いている

どこ迄も、どこ迄に

この白い道の続くかぎり……

月は無表情に夜空をてらしていた。

勝利の夜

遠くからにぎやかな声が聞えて来る
だんだん近くなり私の目の前迄来ていた

何をしているのだろう……
私はのび上つて見た
勝利に燦えた若人の顔、顔……
どつと歓声があがつた
彼等の声は夜の町を一層にぎやかにした
私もいつしかその渦の中にまきこまれた様に
一人ははえんでいた。

我が故郷

一D 北田 宏 司

なつかしい故郷の空よ
又、僕は君を想い出している
かつこの鳴くあの裏山で
いつも泳いだあの谷川で
哀しく別れたあの時までを。

僕は遊ぶことが出来る
こうしていても只一人
ふーつと白い息を吐きながら
朝日の輝くあの山に
夕日の映えるあの谷川に。

僕は聞くことが出来る

こうしていてもあの音が
はつきりと聞こえてくる
いつも泳いだあの谷川の音
いつも遊んだあの森の風の音。

僕は味うことが出来る
なつかしい故郷の味を
忘れられないあの味を
あのもぎたてのとまとやきゅうり
あの山ぶどうもあけびと共に。

僕は想い出すことが出来る
こうしていても幻の様に
浮雲の様に、あの景色を
めぐる水車とあのせせらぎを
月見草の咲くあの小道までも
ああ、なつかしい故郷の空よ
それは永遠に消えない夢として
僕の胸の中に住んでいる
僕の心はあの溪流の様に
森を渡る風の様にふるい騒ぐ
立派に学ぼうとして
正しく生きようとして。

ポプラの枯葉

一D 竹内 公

並木ずたいに歩いて行けば
カサコソカサコソ足の下
拾つて見れば、ポプラの枯葉
並木を見れば、ほとんど裸
音なく落ちて肩にとまる
こんどもポプラの枯葉であらう
やつぱりそうだポプラの枯葉。

午後

一E 久保 幹 男

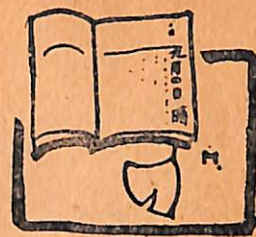


sa

水蒸気と
日光のエネルギーが
緑を濃くし、空気を重くする。

刻、刻、刻

ああ、時計の音だ。



想

隨

ある思出

三B 川本弘子

「君の学校何処かわかった、下高井戸だろう。なぜ梅ヶ丘で乗ったの？」と、しばらくぶりで会った紺野さんに問われ、教室がたりなくて梅ヶ丘中学をかりている事をお話すると『なぜ学校どこ聞いた時おしえなかったの』と問う。私は『だつて知っていると聞いたよ』と咄嗟の場合、口に出してしまつた。『知つてくるくらいならあれほど聞かない知らぬから聞いたのだ』と言う本当にそうだわ。知らないから聞くのあたり前だ。なぜ前に聞かれた時、ハッキリ松原高校と言わなかったのか、校舎のない学校が恥かしかったのか、校舎のない学校はどこか他の、学校とちがうと言つた見方に負けはしなうと思つても、つい自分で変に情けなく思つてしまふ私だつた。

紺野さんのいることも忘れ頭の中に色々な事がかけ回る……電車は私の考えをかきめくる様に雨の中をひた走る。ガラス窓の隙間から、雨が遠慮なく吹きこむ。ひらひらと紺野さんのレインコートが私の膝

彼女はやはり疎開児童で私に非常に親切にしてくれた。ところが評判があまりに悪いので私は驚いてしまつた。

「あの絵は先生に手伝つてもらつたのよ」

「級委員になつたんで、えはつちやつてゐるわ」

「大人の本を読んでいたわよ」と彼女への口癖は絶えなかつた。

彼女は美しかった。長いくつとそつた睫毛の下からちらつと見上げる大きい目、ふつくと少し受け気味の口唇、愛嬌のある可愛い鼻、それにふさふさと頬にふりかかる美しいウェーブを持つた柔かい髪、ほつそりとしたからだつき、ちよつとした表情などに出るコケイツシユな性格がなお一段の魅力となつて私をばうつとさせるのであつた。しかし激しい気性、自信家、冷利な頭脳は必ず反感を呼んだ。

交際が深まるにつれて何事においても彼女に負ける事が一番たまらなくなつて来た。そして彼女の持つてゐる力に対して羨望とねたみを抱いた。

「あの人のお父さん万才師ですつてよ」といううわさが私達の間に広まつた。日頃から反感を抱いていた松本さんは皆に云つた。

「そしてね、お母さんは芸者をしていたんですつて、だからあの人あんなに男の子に好かれるのよ。」皆この時とばかり話合つてゐるところへひよつこり彼女がやつて来た。皆はつんと口をつぐんだ。敏感な神経はすぐにその場の空気を見て取つた。大きな目を真直に松本さんに向けて云つた。

「何の話」口ごもつていた松本さんがその態度にむつとして云つた。

「もちろん貴女の事よ」

ひくつと満智子さんの肩が動いた。

「何なのよ」と又聞いた。

にあたる。『君、祖師谷だよ』と言われ黙つておる。『氣をつけてね』と言う言葉を後に聞き一目散に家へと走る。『さよなら』とも言わずに……。どこの家々にも燈火がともる。外とうの襟を立てた。人々が我が家へと急ぐ。冷たい雨にうたれながら、きつと私達の学校はりつばな良い学校になる、今だつてそうだと二人でつぶやくと、ブツブツ、ヘッドライトが墨の様な細道を、昼間の様に照した。ハット我にかえり今までの遠い思出もさえる。ああ私達の学校はどうとう出来たわ、と天空にさげびたい。紺野さんも『すい分早く出来たね』と喜んでくれた。ああ今日は、あの時の様に雨も降つていない私の心にも……。

十字路をどこから来たのか白ねこが、垣根こしに飛んで入る。私もこの楽しい氣持で早く家に帰ろう、この間の強足の時の様に……。

思ひ出の「コマ」

三A 島方礼子

皆が朝礼に行つた後、新入生の私はぽつんと一人教室に残された。不安で胸が一杯になつていた。とそこへ「遅刻、遅刻」と叫びながら飛びこんで来たのは可愛い頭布をかぶり、赤いジャンパーを着た少女であつた。

私の顔を見てにこにこ笑つた。

「ここへおいておくから、このカバン見ていてね」と言つたかと思ふと又走つて行つた。とつとつきにくい田舎の人にもこんな人がいるのかと嬉しくなり、皆が朝礼から帰つて来るのを心待ちに待つた。

「お父さんのこと」

彼女の顔色がさつと変つた。

「貴女、私にお父さんの職業はお医者さんだつて云つたわね。ところがYさんは大学教授だつて貴女から聞いたのよ」松本さんの目は敵意にもえていた。

突然、満智子さんはあつと息をすいこんだかと思ふと皆が驚く様な大声で「バカッ」と怒鳴つた。そして「わあ」と泣き出した。しやくりあげながら云つた。

「私、偉くなるんだ。皆なんか見下してやるから、私、偉くなるんだ。」

今でもあの時の、あの人の顔をはつきりと覚えてゐる。

六年生の始め頃、彼女が創作をしてみようと云い出した。

「読んでゐるだけじゃつまらないじゃないの」

「何か作つて見ましようよ」

彼女の処女作は「美しき日曜日」。未完であつたがグループの中では一番筆が達者であつた。皆またしても彼女にやられたかと、目の色を変えて書きつづつた。そのうちに新聞を作つて見ようと云い出した。その新聞の名は忘れてしまつたが、組の人々から原稿を集め、それを編集し、一番達者であつた彼女が、わら半紙にいちいち書きこんで出来上つた。新聞は彼の黒板に張られた。

こうして何をするのも彼女が率先してやつたが、しかし悶着を引き起すのも皆彼女だつた。女王のように意のままにふるまつた。皆不満を抱き衝突したりしたが、結局彼女の前に頭が上らなかつた。

現在彼女はあの町の女学校に通学している。今でも私は彼女に嫌悪感を抱きながら、何か憎みきれぬものを感じてゐる。そして彼女によ

つてあの頃の楽しい思い出を持つことが出来たのだと感謝したい気持ちにさえなっているのだ。

空想と現実

三B 山本文子

夢・空想・希望・理想どれもこれも消えては浮び又浮んでは消えるものであるが、これらは何一つとしてその望みが叶うものではない。だが私は夢も空想も希望も理想も同じようなものであると思う。なぜと云えば前にも述べたように、これらはみんな望みであつて、我々はこの様な事を考えて日々の生活を送っていると思う。それで私はこれらをまとめて自分の呼びよい様に空想とした。

空想と現実この二つはすいぶんかけはなれているものである。その一例を挙げてみれば、よく電車の中や道路の電柱やへい等に〇〇銀行の利殖、百万円宝くじ、競馬、競輪等の広告がはつてあるが、千円札の六ヶ月旅行などと云つて十万円、三十万円のくじの当つた事を空想し競馬・競輪の大穴の配当金を空想している。宝くじを買う人は、百万円を空想し、それによつて、きれいな家や家具、調度品、旅行衣類を運想し、次から次へと走馬燈のように連想するものであるが、しかし現実の世の中と云うものは、そういうものではない。アルバイトをしながら、学校へ行っている人、昼間働いて夜学へ行っている人、これから寒くなるのに、上野の地下道に寝る人、母のない子又は父のない子、薄給のサラリーマン、日雇の労働者、体の不自由な人、又酒

——僅かしか知らない時に、却つて本當に知っているのだ。

つい先日、新しい日記帳の頁に、ゲーテのこんな言葉を見付けた。幼児の純真な瞳には、全てが不思議に新しいものとして映り、そのまま肯定して行く力がある。次第に手をとる人間は、加えられた経験と組織から、ものに對する批判と疑惑を深めていく。それは打ち消そうとしても不可能な自然の成りゆきなのだ。そして又、それらの変化から人間は成長し世界は進展する。

——人は人に依つてのみ人となる事が出来る。人から教育の結果を取り除けば、あとに残るものは何もないだろう——

これはカントの言葉だ。——人は人に依つてのみ人となり得る——。人類の世界に生れた嬰兒は、母から人を覚え、その手に育くまれながら多くの人を知り、人と成りつつある自分を知っていく。そして又吾子に人を教え、人としての自分を喜び或いは疑いつつ、死の剣の下でさえ、識ることへの精進を止められないのだ。

常に給え、常に識ることに努めることが、人間として課せられた事業であるとするれば、——僅かしか知らない時——が、一番楽しく一番辛いな時であると思う。然し、又考える——、若し、この單純で疑問符のない世界が実現したとすれば、人はまたとなに樂園と考えるだろうか。一生を向上して止まない、世界に浮き沈みさせねばならないからこそ單純さを憶れるのだ。仮にもこの世界から複雑さを除き得たならば、自然淘汰で複雑化された人間の生理は、脳神経の破壊することから初まるだろう。

此の複雑極まる世界に二十年近く息吹きして、今及ばずながらもたどり着いた十二年間の学習の知識と、同程度の疑念が湧いているのを解決出来ぬままに、なお遠い社会へと歩み行こうとしている私——。

場の女給さん、花売娘達が現実のこの厳しい世の中と血眼になつて戦っているが、ちよつと上を見るとときりが無い。会社の重役、社長さんタイプ。又料理屋へ自家用車を乗りつける官庁の上役、それにちよつと名の知れた私立の学校になると、お坊ちゃん、お嬢さんと云つて自家用車の送り迎えの世の中と云うものは、さまざまで上を見ればきりがなし、下を見てもきりが無い。だがこれらの労働者階級、サラリーマン階級、重役、社長階級、斜陽階級の人達でも上下の差別なく常にその望みが叶わないものと知つていながら、色々な事を空想するのである。だけれども空想をして、さまざまなる事を連想し、それによつて私達の日々の生活の向上とか、うるおいとか、楽しみ等が感じられるのではないだろうか。

考える、こと

三A 丸山恭子

黙つて天井をみつめている。濃い藍の中に浮き上つた木目が、次第に苦しい錯覚を与えて迫る。はつとして目をつむる。それでも——脳神経は擡擡して柔かで厚ぼつたものが、私全体に迫つて来る。夢中とび起きて洗面所へ走る。白っぽいもやがふわつと追いかける。ひやりとして正氣に返る時、水道の蛇口に額を押つけた自分を見付ける——。

ものを考えること——それは善い事かも知れない。ものを識ること——、それも善いことかも知れない。

何も考えない。否、考えるにしても、もつと樂天的な自分になり度いと思う。考えつめて、その中から何か正しいものに歩み寄ることが出来れば、現世の複雑さの中で、安らかな「生き」を得ることだろう。

今日も夕暮に近い。せわしい機械のひびきの合間々々に、ユーモラスが湧いた様に流れている。

唐辛子

二B 今川正男

昔の話——と云つても僕の小学校の二、三年位の事だつたと思う。受持の先生は若かつたせいか元氣で、すぐに「九九」もろくろく覚えぬ僕達に、げんこを惜気もなく落下させたものである。

その癖、どういふ訳か知らないが、女生徒には非常に人氣があつた。

僕はげんこを人より数多く頂戴していたせいか、いまだに好意が持たない。

此の前のある時、例の金切り声をはり上げて、まるで自分の家が火事にでもなつた様な身振りで、何やらがなつていた。

しばらくして先生は、おもむろに上衣のポケットから一つの紙包みを取り出した見ると朝鮮唐辛子である。その手つきが、昔懐かしい校長先生が、勸語を丁寧に取り出す時のあの手つきである。

そんな事を考えながら、先生の行動をなかなかに笑いかけた調子で見守

つていたら、横眼でちらりとこちらを向いて、あら、と云う間にあの真赤な唐辛子を食べてしまった。それには僕も一言もなかった。

二、三人向うに坐つて居た友達が「あー」とかすかにもらす声が聞えた。

恩師には幾年か苦労をかけたが、私達が今迄に、こんなに静かになつたのはこれが最初又最後だろう。

「今後もお前達が勉強を怠ると、この赤いのを食わせるぞ」と、恐ろしくにらみつけた。これは何故か不思議な程、効果があつた。恩師にでも両親にでも、氣に障る様な事はかり云う僕にとつては「大きなげんこつ」と「朝鮮唐辛子」は、一生懐かしい思い出となる事だろう。

私の母

三A 岩田弘子

私は商家の生れではあるが戦争中、百姓をやつたので顔の色はあまり白くなく、しわくちやでやせていて、そこらにいる百姓家のおばさんのような貧相な姿をしている。

しかし、そんなことは「私の母」を思う情に何のかかわりもない。

この母は私にとつて世界に二つともない大事なものである。小学校の時には、私は母のその田舎びた風をあまり好かなかつたので「いやだなあ」と思つた時も屢々あつた。

私は友達之母の若い美しい姿を見ては私の母の姿と比較して、その

は先刻からこの姿勢のままに、微動だにしない。さりとて眠つていないでもないのだ。まつたく無表情にただ坐つて居る。その隣りにもう一人の女が腰を下した。黒いオーバーのポケットに両手をつつ込んで疲れ切つた様な顔をしている。どこか間の抜けた顔。茶色いサンダルと木綿の靴下に、にじんだ雨水が哀れつぽかつた。

窓によりかかつて立つて居る男。何も食べていないのに、始終口を動かす、おまけに音さえ立てて居る。顔役なのか不良なのか見当がつかない。ヒゲの生えた卑屈そうな下品な、押の強そうな顔。黒縁のメガネ、いやという程着ぶくれている。オーバー、ジャンパー、上着、セーター、ワイシャツ、何かじつと考へている。少し氣味の悪い雰囲気だ。

私の隣りに坐つた奥さん。御主人と一緒に。少し綺麗な顔もさうな顔として居る。そしてどことなく粹。「ふん」と思つた。「奥さんかな」

ドアの傍に二人の男が立つて居る。一人は若くて背が高い。一人は中年で太つて居る。二人共いいオーバー。こつちを向いたので二人の顔がよく見えた。若い方は犬みたい、と云うよりはむしろキツネ。中年の方はお腹の出つ張りといいタヌキをつくり。キツネとタヌキは仲が良いのかしら？ それともキツネとタヌキの化かし合い？ ふとおかしくなつた。

終点に着くと、電車の中の小さな世界は解散して、もう少し大きい世界に人々は入つて行く。そして唯それだけだ。

☆

☆

みすばらしさを思い、学校の父兄会等に母の出席するのを拒みさえした。今から思えば実に子供らしいばかりかみえから――。

然し成長するにつれて私は漸く母の思慮の深さを感じる様になつた。そのやみおとろえた姿も、過去半生にわたる私達子供を養育せんが為の大であればある程、そのみすばらしさも甚しくなつて行く。そう考へた私に母は実に尊い仏様そのものの様に思われて来た。

今では私は母を「これが私の母です」と云つて人に誇りすらを感じて示すことが出来る。母は田舎の人らしく性質が単純で、話好きで又話上手である。又歌舞伎座、明治座に一年に三回位間屋先から招待される時、老い近き身の楽しみ少い母にとつては観劇が一番楽しいらしく喜んで出掛けて行くのである。

母は新時代の人の様に教育も何も知らないが、母には愛の心があり広大無限の母性の愛がある。母はよく私を叱る。しかし如何に叱られても、如何に無知でも私にとつて母は一番好ましい人であり、唯一の宝である。

電車の中

三A 布川多恵子

夜の十時、電車の中には色々な人達が乗つていた。冷い雨の降つて居る夜だつた。

私の前にはトッパの襟に深くアゴを埋めた女が坐つて居る。彼女

日本映画の感想

三B 太田幸枝

此頃の日本映画は、たしかに外国映画に比して劣つて居る。新聞を見ても映画批評の所をみると、良く批評してあるのはほとんど少ない。其の理由は何によるか。私達は今「詩についてぼくらの立場から」と云うのを学んでいるが、その一節をとれば、それは詩について詩の低下は一には読者の責任、二には作者の責任とあり、読者の方でいいかげんに読んでいれば作者もいいかげんなものを作つてしまふ、とあるが、映画もこれと同様なことであることに戦後の日本は精神が低下している、これが強い。ただ漠然と面白いか、悲しい、恐かつた等と思つて見て来てそれで満足しているのである。映画製作者の方でも少しも良心があり、良い映画を作るとそれがインテリ階級や上流階級にはいいかも知れないが一般人にはつまらないものだと思へない。前にも書いた通り戦後は精神が低下しているため最もそういう人が多い。だからどうしても良い作品よりも、一般人に通ずる俗悪的なものになつてくる。外国映画の方が日本映画よりもよいと思つて居る人は日本映画の速成で俗悪的なものより外国の芸術的、文学的水準の高い方がよいと思つて居るからである。これでも少しは戦前より落ちついて来て落ちついた作品も、ごく少し出て来た様に見られるがまだ外国映画の良い作品より劣つて居る。私は日本人の良い映画をみる目が高くなり、外国人が見てもはるかにすぐれない様な映画を作り出すことを希望しているのである。

x

四級職國家公務員試験

三A 間 辺 務

私達はこの三月に卒業して大学へ社会へとそれぞれ新しく出発して行きますが、大学に入るにしても、依然として門は狭く、特に東大やその他一流校へ入学の競争率は相当なものです。又就職でも、安定した一流会社や官庁等も競争率は非常に激しいのです。私は大学へ行くか就職するかはつきりしませんが、四級職國家公務員試験を受けて見ようと思つて、受験日の一ヶ月前の十月三十日に人事院へ行つて手続きを済ませて来ました。その日から一ヶ月間、ニュース、ニュース解説を毎日聞き、社会・国語・数学・理科の重要な所を復習しました。新聞は特に夏頃から隅から隅まで読む様に努めました。その間に日本史・英語の試験があり、体操のある時等は疲れてしまつて八時頃寝る事もありました。しかし遂に十一月三十日の朝が明けました。朝八時二十分、日本大学工学部に着き、受験番号をもらつて中に入ると、試験場は本校第二教室の半分位で、薄暗く何となく陰気臭い部屋でした。こんな時に本校の様な良い環境、広々とした明るい部屋で試験が出来たらな……と思ひました。

八時十三分に試験官からの注意に続いて用紙が配られ、九時少し前から練習問題（通性検査）をやリ、九時十五分から九時三十分迄の十五分間に適性検査が行なわれ、九時五十分から十一時五十分迄の二時間、いよいよ一般教養試験が行なわれました。始めの適性は問題五十点を十五分でやるのです。問題内容はやさしいのですが、計算問題

る。

又独立したにもかかわらず、集鳴、フィリップ、マヌス島等に戦犯者として服役をせられてゐる。かつては国の為、君の為と命をかけて戦つた人である。確かに彼等の中には日本を無謀なる戦争におとし入れ、多くの数えきれぬ人々を殺し、不幸にした人々である。だが主なものはすでにA級戦犯で処刑された。いまだに服役されている人々は上官の命令に従ひ、唯ひたすら国の為と命をかけて尽した人々である。結果的には悪かつたが、その罪も年と共に流れ去つてもよいであらう。

人間は本能的に他よりも優越しようとする希望を持つてゐることは人類誕生以来避けられぬ事である。

先日のある新聞に著名な人が戦争裁判は戦勝者による一方的な行為であると述べているが正にその通りであると思う。

彼等のうち誰が好んで戦争を起したか、結果的に見れば罪悪であるが、逆であれば英雄である、英雄ではあるが大罪人である。罪人は罰せられなければならない。それが戦敗者のみが罰せられてすむであらうか。一人では争ひは起らない。

戦争者よ、一步退いて自己反省せよ。戦争中におけるレッドクロス病院の攻撃、撃沈、歴史上かつてない悲惨なる残虐行為をなした原子爆弾、しかも非戦闘たる何ら武器なき人々に。先の第一次世界大戦に於て、ドイツ軍が使用した毒ガスに対して国際的に禁止を受けた。毒ガスの使用は戦場に於てであつた。彼らは武装した戦闘員であつた。だが禁止されたのであつた。

原爆は毒ガス以上の力を有する。この大きな犯罪の責任をとるのか勝利者という名の下に葬られてもよいのだろうか。勝つ手段としてか

や、その他色々やこしい問題で、三分の二位しか出来ませんでした。次に一般教養試験は問題五十を二時間でやるのですが、問題内容は社会・国語・数学・理科等で、アチーブ式ですが非常にむづかしい。特に理科系問題はむづかしいものでした。試験が終わつて帰り仕度をしてゐる時、私の隣にいた二十一、二位の人が、むづかしかつたナと一人言を云いながら出て行きました。この後十二時半からの受験者もずい分居り、大体午前の人と同数位だつたと思います。これらの人々の中から何人が合格するか判りませんが、相当な競争率と考えられます。

帰る電車の中で、もつと勉強して置けばよかつたと、今迄余り怠けた自分を反省しました。そして過ぎてしまつた事は仕方がないから、これから、これから卒業迄の短い期間を、出来るだけ勉強して、出来る限りの努力のもとに本校を卒業しようと決心しました。

勝 と 負

二A 安 達 馨

対日講和条約が締結され、日本が独立してから既に半年の月日が流れた。日本は独立した。しかし、街頭には駐留軍の兵士が占領當時と変わらずに見られ、主要道路には屋間からヘットライトをつけた大きな自動車や戦車や砲弾を積んでうなりをたてて走つてゐる。

冬を迎えて極寒地シベリヤには我等の同胞が理由なき労働に課せられてゐること。内地にゐる留守家族と共に苦しい日々を送つてい

まわらないだろうか。原爆によつて強大なる水爆が各国に於て研究されている。赤色陣営と民主陣営との冷い争ひも厳しくなつてゐる。争ひは絶対に避けられぬものだろうか。

死

三B 鈴 木 久 子

毎日新聞紙面を見ると、いろいろな事が載つてゐる。少年犯罪、強盗、少年少女誘惑、殺害、朝鮮問題、駐留軍から来る裁判権、資金問題、いろいろな事件が毎日の新聞紙上を賑わしてゐる。その中の、自殺（死）を取り上げてみた。どうして死にたくなるのか、私は考えて見る。何度考えて見ても「自殺するのはこの世に希望を失つた時、又悲観の余り死ぬのだ」。こんな事しか浮んで来ない。けれども私は死ぬということを考えてはいけなかつた。親子心中、夫婦心中、嫉妬から起る自殺、事業の失敗から起る心中、失恋自殺、まだまだいろいろな自殺がある。どんなに、辛くとも生きていけば、いつかは幸福になれると私も信じてゐる。ある学者が云つたところによると「人間は七十年の人生の内、不幸なのは五分の一で後は皆幸福」である。考えれば本当かも知れない。私達は辛い辛いと思つても、それはその時の我慢も入つて辛いと思ふかも知れない。だから一年後、それとも半年後に考えると「ああ、あの時は辛くとも楽しい思い出だつた」と思う。その時は「私以上に苦しんでゐる人があるだろうか」と思つてもその時は感じなかつた楽しいことが後迄もはつきり残る。これは、私の経験した事なのだ。けれど今考えてみれば「ああ、あの時死なな

て良かった」と思う。今は辛くても、すぐに幸福はやつて来る。一生不幸で終る人はいないと思うのだ。死んでしまつたら終りではないだろうか。生きぬく事を、楽しいではなからうか。死ぬことはつまりその人の心が弱くからだ。生きぬく力がつきまして、死にたくなるのか、この世が嫌になつてしまつたのだ。生活困苦の為に親は生れたばかりの、何も知らない子をつれて入水したり、幼い子をだまして毒入りの菓子を与えたり……、こんな事をすれば、親は三重、四重の罪を犯した事になるのだ。ストウ夫人によつて書かれた「アンクル・トム物語」の主人公、トムだつて、残酷な主人にいられたら苦しい。苦しんだ。けれど、トムは普通の人にはとても耐えられないだろう、苦しみを味つていても、心は春の様だつた。トムは生きているうちは肉体の不幸だつたかもしれない。けれど、心は只一筋に神につかえ、働を愛し、働の為に祈りつつ、神様に召された。意志が強く、信仰さえあればその人は救われるものと信じる。この頃自殺をするのは、必ずしも生活困苦の為にだけではないだろうけれど、この頃のは大部分とはいわないが、その様な理由で死ぬ人が多い。人間はそれだけ我儘なのだと思ふ。今、自分は幸福であるのを考えれば、自分でも自分を、つまらなくして果ては自殺・死までにするのだらう。「何故もつと強く真剣に、探究しないのだらうか」私はこう思つて、続々自殺する人達を責めたい氣持である。私も、前はそんな風に一時の感情で死にたいと思つた事があつたけれど、今は却つてあの時の氣持を嘲ける様な氣持でいる。それは、今でこそ「自分が生きて為すべきことを為してから死んでもおそくない」として又「生きていてよかつた、生きていてこそ此の幸福、このたのしさを味わうことが出来たのだから……」と考えられる様になつたからである。そして私は、こんな風に考えられ

る様になつた事に対して喜びと幸福を感じている。だから私は「世の中の人々に死ぬのだけはおよしなさい、死ぬことはどつまらないことはありません」と言いたい。

生と死について

二〇 篠崎喜美子

私は今「生」に対して妙に執着を感じ、「死」に対しては、觸れたくないと言ふ氣持を抱いている。つまり、私は生きたいのだ。何故に人は生きねばならないのか、と云ふ事をつかむ様な疑問は今だに判らないが、何もかも超越して「生」の喜びを感じたいのだ。幾多の苦難が横たわつてゐる生々しい現実の世界にある私にとつて果して「生」に対する喜びが見出されるか、どうかは判らない。然し、私はきつと何かの形でその喜びを味えるものと確信する。それは「死」に至つて始めて判るものかも知れない。或いは幸ひにして生きてゐる時にはつきりと感じられるかも知れない。

とにかく今私の目の前には、希望も何もないけれども、只生きたいという強い欲望(本能)が、私という人間をとりこにして、それが「生」に対する執着となつてゐるのだ。しかし、生きたいという事を真剣になつて望んでいても、それはその場で直ぐに解決出来る様なものではない。生きていくこと即ち人生は、決して一時的なものではなく、常に存在するものであり、且つ「生」と「死」との循環法則に基いてなされる処の一本の路である。従つてその長短は、「人生僅かに

五十年」と云つて早急に暮してゐる人の人生は短かいものであるし、「人生は長い」と云つて悠長に暮す人にとつては、人生は長いものである。いわゆる、人間が生きていくこと、即ち人生とはその人一人々々の考え方に依るものであり、これを考えることなくしては人生は成り立たないと思ふ。

要するに、生きたいという欲念はあくまでも思索であつて、決してその場で実現するものではない。生きるためには、こうしたらいいとか、ああしなければならぬとかを、頭の中で考えて想像に依つて割り出していくのであるから、生きたいから生きようなんて、そうは簡単にいくものではない。

想像に依つて割り出した処の人生に対して、自分の生命力が働き、これが人間の生きてゐる証となるのである。

私には私一人のみの人生が、私だけがたどる路として存在している。私はこの与えられた只一つの人生に対して、どこまでも誠実に従順にありたい。

何のために生きるのか……、こんな疑問を抱いていた処で一体何になるう。いつまでも解決出来ずに、只焦つてばかりいなければならぬ。いなくて、全くいやだ。それよりも一つしかない貴い生命を如何にしたら最も有効に費していかれるかを、私だけの力で考え、私だけの力で行動していきたい。

自分の人生は自分の力で築きあげて行かねばならない。従つて、あたりの中傷やつまらぬ欲望にいらいらこたわつていたら、絶対にそれは巧くいくはずがない。しかもこれらの疑問は、私を「死」に至らしむるより手段をもたないのだ。

今私は、「死」に対して触れることを非常に恐れている。「死」は、

「生」に対して、いや、生きようとする力に対して執念深くつきまとつてくる大きな邪魔者である。しかしさうかといつて、「死」に関し一切無関心になることは出来ない。

「死」は人間が「生」の喜びを感じると同時に湧き起つてくる一種の観念的なものである。つまり、人間が人生に最大の感動を覺えた時必ずその後「死」というものを考える。「死」とは一体どういうもののなかか。と――

しかし「死」についてわかるというものは何もない。只そこにあるのは観念のみである。或る人間は「死」を美しいものと考え、或る人間は「死」を恐ろしく無意味なものとも考えるかも知れない。自分の手に取つて見ることの出来ないものであり、人間が生きていくこと即ち「生」の経験という様なものは、その人間が生きてゐる以上行われ、かつ自分にもよく味えるものであるが、死んでからの生活、即ち「死」の経験というものは、「生」を受けてゐる限り行われることも出来ないし、味うことも出来ないものなのである。

「死」に対して私が抱いてゐるものは、一種の恐怖感でもあり、又安定のしないぐらうしたものだということがある。これは結局まだ自分は「生」の喜びを感じていないからなのだ。

人間にとつて絶対的なもの――「生」――への熱意が、大であればある程、「死」に対して抱く処の恐怖感とか安定しないものとかいふのは、全て「生」の喜びが克服してくるだろう。

いつ味わえるか知れないという「生きる喜び」を、私は信念をもつて、与えられた私だけの人生行路上に、素直に誠実に求めて行こうと思ふ。

廣告一景

三A 木村 恒雄

高田の馬場の駅前で宣伝用の「ノーション」の袋を配付して居た。何心なく与えられたままに貰つてポケットに入れて置いた。三日経つて余り頭痛がするので、ふと此の間の事に気が付いて洋服のポケットから出して呑む氣になった。見ると裏面に一日三回服用すべしと書いてある。開いてみると、二回分入つていた。一袋貰つた人が二回服用する。一日三回とあるのもう一回服用したくなる。

こんな様に私の心理は働いた。次の瞬間敵の術中に陥つてしまつた事を思つた。この二服はあと一服のみたさに薬屋に買いに行く様にしかけたわけなのだと思つた。勿論私は二服のんで後は薬屋へ買いに行かなかつた。頭痛は一向よくならなかつたが。

理想について

二C 西沢 昌子

美しく真赤に焼けた夕日は、今まさに西の彼方に沈もうとしてゐる。時々、冷たい風が頬を撫でる。私はただうっとり自然に変化する暮色を眺め入つた。

今はもはや私達が夢にまで描いた校舎はここに現実化し、こうして

東京へ来て三年もたつた現在、なんの変りもなく毎日、学校へ通えたことは、父母のおかげである。口には出さないが私は深く感謝している。

ある私の友人で、学問も優秀で、人柄もよく、何一つ欠点のないその人は、将来大学を出て、女教師になるつもりで幼い時から、大きな夢をいだいてゐた。しかし、運命は皮肉なもので、高校進学準備で毎日遅くまで勉強していたのに、突然、母の死のため、大きな夢は実現されず、現在は家の百姓を手伝いながらさびしく和裁を習つて暮らしている。

理想が表面はいかにも人生を美しく飾るかのごとく見えても、その実、いかに多くの悲慘を人生にもたらしたかを、この際とくに反省してみた。

理想が達せられなくとも、心を豊かにし、現実とならなくても、人生を楽しく愉快にすることは大切なことだと思ふ。

理想は美しく、大きいほど価値のあるものだ。美しいとは、きれいに美しく着飾つたことではなく、大きいとは大ボラのことをいうのではない。

現実を一步でも前進させるものが偉大なのであり、前進のものが美しいのである。



砂山から見ると校舎も外面的には、すがすがしく立派に見えるが、内面的にはかくしきれないほどの苦勞を包んでいる。

昭和十八年、戦争の真最中、すさまじい爆音激しい地鳴り、家の窓カラスをかすめて飛ぶ弾、あの恐ろしかった戦争も終り、今はただ、こうして暮色を眺めながら、勉強のこと、スポーツのこと、又、将来の就職のこと等、様々自分の思つてゐることを頭に描いてみた。

理想とは何か、ある人は現実から飛び離れて完全なものの姿というふうに考へてゐる。

若人は皆、理想を持つてゐる。理想を持つことは実現されなくてもなんともなく楽しいものである。何か理想を持つていれば、それに応じて少しでも現実化しようと努力する。

どんなに苦しくても、どんな状態に於ても理想を持つことは幸福なことであると思ふ。

何か突拍子もない美しいもの、完全なものを、たしかに心のうちだけでは描くことが出来る。そして描くことは自由でさへある。

私は戦争中から戦後にかけて、まる六年間父母の田舎で馴れぬ百姓仕事を手伝いながら暮らした。どんなに苦しい生活を送つたか、以前のような生活の半分でも、あるいは三分の一でもして見たいと幾度思つたことか。

東京生れの私にとつては、やはり真から、田舎を愛せなかつた。どんなに東京を恋しく懐しく思つたか。朝早くから夜遅くまで、汗みどろになつて働く父母、一日も早く、もう一度東京に出たいと、毎日、口癖のようにいつてゐた。私もどんなに待つたか。やつと、父の知人からの手書で、あんなに皆で望んでゐた夢が実現した。父母の歡びは一通りではなかつた。私もどんなにうれしかつたことか。

親父さん

三A 田中 朝子

私の父は、四十七才の頑固ものである。

そして私にとつて一番の喧嘩相手である。二、三年前迄は大声をあげてよく笑つた父が、この頃、年のせい、いやに元氣がないのがさびしい。

そんな父でも、私の母とは、はなやかな恋愛結婚だと云う。母は私と同じ年で父と結婚した。

でも母は、もういない。

「朝子、お前はいくつだい？」と父は時々思い出した様に云う。

「十七よ」

「そうか」

「でも教へ年じや十八よ」私が得意げに言ふと、

「十八か、フーン」

と父はその成長ぶりに感心と驚異のまなざしで私を見る。

そんな父の背に私はきつと、若い頃を思い出しているんじゃないかと思ふ。

父はとても短氣である。氣障の悪い時は、まゆげを八の字にして家中をどなりちらす。

「ほら、何ぐずぐずしてゐるんだ、早くしろ」

「うるさいわね、自分こそ、何うろろしてんのよ」

「何だ、その口のきき方は」

「自分からどなつて何よ、フーンだ」
「コラノ」

父は本気で一かつする。

そうなると思はれたもので知らん顔している。でもあんまりしやくにさわると

「ハゲーク」

とどなる事もある。

でも後から考えると、いつも後悔し、こんな娘をもつた父が可愛想になる。だから時々もつと孝行しなければと思う。

でもすぐ忘れて口ごたえする。そんな私を、父はしょうがない奴と黙認している。

私は少女歌劇が好きである。

よく家でやつて見せたり、話したりする。そんな、つまらない話を父をフンフンと良く聞いてくれる。そして、どんなものでも心配らしく、時々実地見学に行けらし

私が入りたいなあ、なんてぐちをこぼすと、そんな心がけで耐えていかれると思うのか、と真顔で言つたりする。

そんな時、私は、はれものにさわられた様にぎくつとする。

用事を思い出したのか、よいしょと立上る。父に私は

「親父さん」と言つて見た。

「なんでございますか、お嬢様」

と、おどけながら言つている父に、私は、いつまでも長生きしてくれます様にと心でつぶやいた。

×

足音と「オス」と云う言葉

三B 遠田種子

五人の足音。今の私は音のみに楽しさを感じ又音に敏感だ。それは三日前盲腸の手術をして、ある病院に入院して横たわっている今の私だ。始のうちは足音がすると、ただの道具、いや人形の様に型くたつてつめたくなつてしまふ私、そしてふるえていたのに、どうだろう。今は冗談を言つて、一つの、一日の、楽しみとなつてゐる。「コッソツ」とノックをして五人が入つて来る。それは院長先生、副院長、婦長さん、看護婦さんだ。「如何ですか？」毎日同じ言葉、そして治療をおえて行く日、又今日三日目なんかは、一緒に入院している姉と話を許された。

「今日からはお姉さんと少しづつ話をしなさい」と言われた時、横をむいて「お姉さん「オス」」と言つてしまつた。いつもの私の口の悪いくせが出てしまつたのだつた。

そして皆大笑いしてしまつた事は言うまでもなく、「オス」は何から起つたか？なんて副院長先生に聞かされたが、私はもちろん知らない。私たつて中学の時、皆が言っているのを覚えてはすまないのだから……でも先生いわく、海運の言葉で「おはようございます」の頭を尾をとつて……「オス」になつたのだとおしえくれた。そして皆は笑をたえさないうで出て行つた。それからと言うもの毎日私を「オス」にさせられてしまつた。副院長先生の夜まわりの時などは「オス」どうした」にやつてしまつた。それからと言うものは、どんな悲しい事

が起つても悲しい思いにふけても、足音一つで楽しくなつてしまふ。

看護婦さん一人の時も冗談を言う様になつた。そしてだれがおみまいに来てくれた時よりも楽しい一日となつた。又変つた味わい、ただ一言、二言の冗談、そして、二、三分の事なのだが、それが楽しい。そして又まつ長い時間が楽しい。そしてその後、ただ一人窓を眺めてにこにこして何度も何度も今までの事の出来事を繰返す私なのだ。病院生活の月日がたつにつれて重みがくわる様に、楽しさが増す。今それをおもひだけでも、楽しい、苦しい想いが足音と一緒に、ありありと聞えて目に見える様だ。

靖国神社参拜の記

二A 長谷川 透

衣がえをして、赤い羽根をつけるのが十月という月である。天は高く澄み渡り、土は金一色に色どられるのが秋である。心身を鍛えるスポーツの秋と、又燈火親しむ勉学の秋とも云う。僕らはどちらを遊ぶか判断に苦しむのが秋、即ち秋は実に多彩な行事が展開されるのである。中でも去る十月十八日から数日間にかけて、靖国神社の秋の靈祭が盛大に行われたのは注目すべき国民の一行事であつたと思う。

戦後七年も経つた今日、ややもすれば忘れがちな戦死者に対する関心が高まつて来たのは喜ばしいことである。が、しかし現在国民の最大の注目の的である再軍備問題も又高まつて来たのにも注目に値す

る。人というものは難を脱すると恐ろしさを忘れるものである。何故なら、七年も経てば僕等の生活は戦前並の水準に達し、恐ろしかったあの戦争の悲劇を忘れて来るものである。原爆の恐ろしさ、家のなかつた悲しさ、父の居ない淋しい家庭の悲しさ、に直面しなかつた幸福な人でも、誰でも一度はこの様な事を想像したことはあるだろう。「戦争はもうごめんだ」、の言が当り前である。しかし七年間の時代の経過は、現在の日本に於ける軍備の必要性を充分理解出来る理窟を持たせた。再軍備即ち戦争と考えるのは確かに神経過敏な人の想像かも知れないが、しかし誰が戦争は絶対にないと言ふ出来ようか。

この月の二十二日は父が死んでから十年になる。僕は兄弟をろつて参拜に出かけた。平常でさえ東京見物の人々でにぎ合うこの社は、この日のにぎわいは云う迄もない。共同募金や白衣の人々の募金の姿が境内の各所に数多く人目を誘い、人々の心を強く痛ましめるものがある。軍国主義的な精神から民主主義の精神へとの、国民的雰囲気だけが変つた点である。幼い時、僕は父と手を繋いでこの砂利をさくざくと歩いたことを覚えてゐる。父は何を祈つたのか知らないが、多分同胞の武運を祈り、又亡き同胞に戦果を告げたのに違いない。父も自分が太平洋の海に消える迄、よく僕達に「たまには靖国神社に参拝しなさい」と書いてよこしたことも覚えてゐる。

入りまじる参拝者の中で僕も「武運長久」に変わる「世界平和」を祈つて境内を去つた。後を振り返ると大きな鳥居がどつしりと秋空を仰ぎ、鳩の群は、秋たけなわの陽を浴びて、東京の高台にはかならず霧阻氣をたたよわせていた。僕は兄弟は各々何か思いながら沈黙のまま歩いてゐた。僕は父の事を思つて居た。兄や姉もきつと父のことを思つてゐたに違いない。そうだ、きつとそうだ。

標準と方言について

二〇 石井 君 江

我国には、各地の方言と標準語とがある。国語教育に於て地方事情に關係のある語彙を除外しても、まだ音韻や語法等について問題がある。先ず音韻の問題から例をあげると、地方によつて「クワ」と「カ」とを区別して発音したり「ジ」を「ヂ」と「ズ」と「ツ」とを区別して発音したりする。しかし現在この音を区別する地方に対して、「クワ」や「ヂ」「ツ」を発音すべからずと命じたら果してその取扱いは正當なりとしてこれに服従するであらうか。

語法についても、西日本の地方では古形の保存されているものが多い。係結の残存、二段、十変動詞の遺存などその著しいものである。これらの語形は放棄するとしても西日本の人々が、京阪の方言に對してかなりな愛着をもっている事は事実である。

単語の方面を見ると一層事情は複雑してくる。例えば「蝸牛」については「デンデン虫」「カタツムリ」の外に東京語として「マイマイ」「ツブ」がある。「南瓜」については「カボチャ」「ボーブラ」「トウナス」「ナンクワ」がある。「蝸牛」の標準語は「カタツムリ」かと思われるが、「南瓜」の標準語は「トウナス」か「カボチャ」か判明しない。

国語の統一を考えるならば一日も早く標準語制定の機関を設けて、標準語、標準音、標準語法、標準語彙を公示して掲らしむべき所を知らせねばならないと思う。

「う」はそのまま使われるが「面白デス」は「ノ」を必ず入れる人がある、又「面白インデス」と鼻音を入れる。「面白インデンデショ」や「面白いでしよう」とは意味が少し変つて来る。

助詞について変つたものでは「シキ」というのがあつて「ナンソソレシキノコトニ」といふ「その位の事で」と云う事である。「ばかり」は訛形の多い言葉で「コレンバカリ」「コレツバカシ」「コレバツチ」又は「コレツバカシ」「コレバツチ」と半濁音にも云う。聞いた様だがと云う時に「ミタイ」という言葉を使つて「聞イタミタイ」が忘れた」と云う。この頃では「オカシイミタイ」と云う様な云い方もするが、これは一種の流行語であらう。「ソソナコトオカシツクテ」といふ表現も従来使われていたが、近來やや濫用氣味である。

終助詞では「ゼ」を使う。男が念をおす時に「頼むゼ」「出かけヨ」等、尙、女専用のものには「ワ」がある。「頼むワ」「イヤダワ」等。「ネ」「ヨ」は男女共に使う方が違う。

この様にしらべて来ると、いろいろ感じた事、氣の付いた事がある。そして、国語教育に於て方言を標準語なり、東京語なりに統一することは無理なことだと思つた。

太陽のない街を讀んで

二A 敦賀 十 藪

著者は徳永直氏である。彼の体験ともいふべき内容は私の社会を見る目を養つてくれた。書を読み終えた私の胸に盛り上る或る力強さを

ここで東京の方言について少し述べようと思つた。

東京では、江戸時代からの特長として「エー」を云う。「ありがた」を「アリガタイ」といい、「行かない」を「イカネー」、又は「エカネー」といい、「知らない」を「知らネー」と云う。この様な事は弟もよく使うので何時も面白い方をすると思ひながら聞いている。これは関東一般の習慣と見られる。

音韻については古くから云われている事だが、「エル」の連音は「エー」の長音に化せられる。これは東京語としては下品な訛りとされて職人や下層階級で用いられている。例えば「教える」が「オーセル」となつたり「見える」が「メール」となつたりする。学友から何か教えてもらいたい時「何々オセーテね」といわれる。

又、転音では促音化が顯著であり、この場合サ行音がツ行音となる。「お父さん」を「オトツツアン」「真直」を「マツツグ」「御馳走」を「ゴツツオー」と云う。伯母の家へ時々来るお客からよくこの様な言葉を聞き、あの人口がまわられないのかと思ひながら聞いていた。「クワ」を「カ」といつたり「シュ」を「シ」といつたりする事も古來有名な訛音で「火事」を「カジ」、「新宿」を「シンジク」といふのは常の事である。最も有名なのは「ヒ」を「シ」と訛る例である。私が田舎にいた時、田舎の子から「東京の人はヒの字が云えないから「ヒノ丸」を「シノ丸」と云うんだと聞いたが、氣を付けていると、ヒの云えない人になつたがあう。しかしこれ等の音は注意すれば正しく発音出来るが、語彙の上では区別の出来ないものが多い。

語法において、「キナイ」とは云わないが「キヤシナイ」と云う。これを「コヤシナイ」という人もある。

敬言の表現は頗る複雑である。「です」の用例で「面白いでしよ

感じた。叩きのめされても叩きのめされても、それだけ一層強く頭を持ち上げてくる粘り強さを感じた。しかし、或る面に於ては不安な吐息をつかざるを得なかつた。労働者はいつまでも苦しみぬるつぽの中でもがいていなければならないのかと。

「太陽のない街」、そこには東京随一の貧民窟、トンネル長屋があり、十数年前の千川上水があらゆる汚物を呑んで流れていた。山と山とに狭まれた谷底の街は、太陽の光から遠ざけられたように一年中重苦しい灰色の雲がたれこめていた。時には雲のすきまからさしこんでくる光も何とはなしに弱々しかった。冬になると荒れ狂う寒風が清水谷の丘陵から、白山の森から、両方から落ちこみ、ぶつかり合つて叩きあげ、渦まきながら雨にさらされた長屋の頭上で竜巻の様に巻き起つた。街は事実、太陽のない街であつた。大同印刷会社は街の中心にその巨体をすえていた。ここ五十余日、その大煙突から煙は絶ち、

巨体は灰色の空の下に力なくうずくまつていた。現在そこには命をかけた三千の労働者と資本家との激しい闘争がくり上げられていた。彼等は生きるために闘わなければならない。無産者にとつて対抗出来る唯一の武器は団結の力と意気とであつた。一万五千の糊口をふさがれぬ為、争議を勝利で導く為、五十余日必死の努力を続けて来たのだつた。争議の起りは鑛造部三十八名のクビを名目として組合掃滅の具体化であり、従業員怒りの対立であつた。資本家は雇用者として一から十までの支配権を握つてゐる。労働者はその小さな力、資本家の何分の一にも足りぬ小さな力を結束させることによつてのみ活動することが出来るのである。それらを組織する組合を破壊させることは明らかに資本家の手中にその絶対権を与えることである。その様な結果になれば、只牛馬の様に駆使されるであらう。私はここで一つの矛

盾にぶつかった。いつの世に於ても労働者は国民の大多数を占めていたが、社会の各機関を握っているのは労働者である。いわば彼等によつて社会は組織され運営されているといつても過言ではなからう。最も重要な地位にある彼等は、より良くその生活を保障してもらふのは当然前であると思う。働いても働いてもその生活が安定せず、かえつて苦しくなつていく現在の世に於いてはその矛盾が当り前の如くなつてゐる。この事柄は二十数年前の社会と何等変ることがない。あらゆる社会の諸機関が向上し発展しても、働く者の地位は一向に向上しないのはどういふわけであらうか。争議団の一員として活躍しているトネル長屋の人達も、お互に楽しく幸福でありたいと思ふ心には変わりはない筈だ。現実には彼等にとつて苛酷であつた。只働くだけ働いて綿の様に疲れた身体を寝床へ横たえるだけの生活には満足していなかつた。自分達のこの様な境遇がどこから来ているのか、何が原因しているのだろうかといふことを考えた。そしてその結論は資本家の営利主義的の横暴な仕打ちにあることに気がついた。等々は資本家を憎んだ。そして石にかぶりついても争議に勝たねばならないと思つた。トネル長屋にも数人の同志がいた。彼等の一人は病人を養ひながら争議と闘つていた。病父は娘が親と意見を異にしているのが気に喰わず、一ぱしの考えで親の命令にすら落ちついた態度で反駁し説諭するのが憎かつた。この場合、娘にとつて親はあくまで親である。例え病身であらうと何であらうと、民衆のために働くといふことは大切なことであるが、同時に親の理解をよく求めることも必要であると思ふ。この点娘の行動にはあまり賛成できなかった。新聞はこの未曾有の大争議の成り行きを盛んに報じた。それはど従業員の結果は固く、資本家との対立は激しかった。争議を指導する者は明らかに共産黨員であつ

た。彼等は自分達の生命を賭してまで争議の勝利を街の無産者の幸福を得るために奮闘してゐるのであつた。共産主義といふことに一種の偏見を持つてゐるのか(又持たされてゐるのかも知れないが)彼等に對しては疑い深い目でその行動を見守つてゐる。集合所を提供してゐた者が黨員であるといふことがわかつた。彼等を嫌惡しその態度を変えた。一般民衆と彼等とのお互の信用と理解がもつと必要ではないかと思ふ。しかし、この場合民衆の爲に闘つてゐるのに、その様な態度を取ることは私にとつて寂しく不甲斐なふを感じさせた。政治的方面からの二、三の原因が争議を決定的な段階まで追い込んだ。日増しに政治勢力が強くなるにつれて組合を裏切る者が出て来た。彼等は自分達の足元の土が一つ一つくづれていくのを感じた。それと共に腹の底に新しく積み重ねていかねばならない知識と反抗心で身内の充実を感じた。労働者の怒は遂に爆発した。その突風の様な勢は王子の街を包み乱闘がくり広げられた。しかし結果はその立場を有利にしなかつた。大同印刷会社は争議団全員の解雇を宣言すると共に、少数の裏切者を以つて作業を開始した。この様な不当解雇に甘んじていたならば今迄の苦心は水の泡に帰してしまふのだ。彼等はスキャンダルに得々として説いた。しかし失業者には階級的道德心なんか毛頭ない。只喰う爲に生き、延びる爲にその糊口を求めていたのである。血を吐くような叫びで一青年が訴えた。「皆さん目を見て旗を見てくれ、この旗は争議団三千人の魂だ。獄中にある犠牲者も、病死した可愛想な団員は狂人になつてしまつた。団員の家族も、それらの魂が皆この旗に織りこまれてゐるのだ」。切々とした叫びは失業者ばかりでなく私の胸にも深く喰ひ入つた。いつの世に於ても或る程度の貧富の差は免れない。しかし階級相応の生活水準はあると思ふ。労働者は労働者として

働く者の喜びと楽しみを味わうことが出来なければならない。資本家は労働者に対して正当な義務を果し、その豊富な資本で社会の諸機能

を円滑に活動させ、その発展に力を注がなければならぬ。自己の慾望のみで世の中を運営していこう等という考えは社会の秩序と安定を乱す大きな誤りであると思ふ。私は失業者のいない(又失業対策の整つてゐる)誰でもが楽しく働ける世の中に、働けば働く程生活が向上していく世の中になることを最も強く望む者の一人である。団の何者かの放火によつて街に君臨する魔の城が焼け落ちてからは、団の制度は完全なるものではなかつた。研滅は寸前に來ていた。三千の同志は全く疲れきつてゐるのだ。争議中、何等団の爲に活躍しなかつた右翼的な人達を中心とする二、三人の人々によつて会社側提案の屈辱的な三つの解決条項を承知してしまつたのだつた。

- 一、会社は争議団解散後任意選択に依り若干名採用すべし
- 二、争議団は会社規定の退職手当金を以つて解雇手当たる事を承認する事
- 三、会社は解雇手当の他に金一封として争議団へ対し何万円かを交

付すること

勿論、彼等がこの事項を了解する筈はなかつた。会場に於いては一青年が立ち上つて叫んだ。「諸君、偉達は九三ヶ月間血みどろになつて闘ひ続けて来た。或る者は獄中へ行き、或る者は狂人になつた。しかし、そうした犠牲はこの様な解決条項を受け取る為ではなかつたのだ」。「そうだ」聴衆は丸葉の様に言葉を呑みこんで答えた。ここで屈してはいけぬ。もう一歩前進しなくては。太陽のない街が光輝く街にしたかつたのもこの様な条項を受け取る為ではなかつたのだ。闘争はこれからなのである。真にその手段を選び、有効な方法で正当な

解決条項を見出し、一日も早く太陽のない街に団旗がひるがえり、明るい歌声が聞えて来る日が一日も早い事を祈らずにはいられない。

漱石の「草枕」を讀んで

一 A 松本幸子

「草枕」これは漱石の作品としてあまりにも有名であるが、私にはむずかしくて、よく理解することが出来なかつた。けれど、むずかしくても、むずかしいなりに感じたこと、それを幾年かたつた後に讀み返すのも又一興ではないかと思ひ筆をとつてみた。

漱石は春を愛した。自分の愛する春のあらゆる姿と、あらゆる凡物とを描き出したのがこの「草枕」だといふ。

第一に感じたことは、形容の面白さといふことである。これは同じ漱石の作「虞美人草」にはあまり感じられなかつたが、わが輩は猫である。「坊ちゃん」と共に「草枕」の中にはユーモアたっぷり形容を見出すことができる。例えば、第五の髪結床のところで「親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、断わりもなく、前後の猛烈なる運動を開始した。此処が、黒髪の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往来する。余が頭には何十万本の髪の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こぎにされて残る地面がべた一面にみみず腫にふくれ上つた上、余勢が地盤を通して、骨から脳味噌迄、震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を掻き廻した」といふところにある。こゝは「春の

風」と題して中学二年の時、教科書で習ったことがある。その時も、親方の様子をこれ程までにびびったりと表わしているこの文に、驚きもし、面白くも思い、そして好きになつたのであるが、今再び始めから通して読んでみると面白さは又格別である。これは時の茶屋のところでも同様であり、この二ヶ所は、志保田の邦美さんの話よりもずっと私にとって印象的で、且興味深いものであつた。

次に、この小説は実に理窟が多いということを感じる。他の人はどの様に感じるか知らないが、少くとも、私には理窟をこねまわしている様に思えるのだ。たとえば、主人公の画工が、志保田に宿をとり、その夜更けに海棠かと思はれる幹を背に、長良の乙女の歌を歌う幻ともつかぬ女の姿をみるところがある。普通であれば「……枕の下にある時計迄がちくちく口をきく。今迄壞中時計の音が氣になつた事は無いが、今夜に限つて、さあ考えろ、さあ考えろと催促する如く、寝るな寝るなと忠告する如く口をきく。怪しからん」。ここでやめるはずであるが、漱石はその後「怖いものも只怖いもの其儘の姿と見れば詩になる……」。と失恋が芸術の題目となること、芸術的の立脚地についてと、色々引っぱり出してゐる。理窟っぽいというのは会話においてもいえる。物語が進行してゐる。がその途中途中で一寸のことでもわき道へをれる。そして理窟を云つて本筋にもどつてくる。作者の言わんとしていることは、大抵物語の中に折りこんであるのが普通である。この小説も決してそうでないとはいわれないが、どうも私には解し兼ねる。又、画工の非人情論、これは漱石の非人情論でもあるが、それにしても秋の頭では理解するのが困難である。こんな所に私がこの小説をむすかしい、よく解らないと思うゆゑがあるのではないかと思われる。

そして、草枕は小説らしくない小説、そんな感もないではない。しかし、今まで書いた私の様な理窟をぬきにしてみた「草枕」は人の心を温かくする様な、漱石の春に対する大なる讃歌であり、秀れた漱石の代表作の一つなのである。

夏目漱石著

「坊ちゃん」について

一 D 田中 明

今、漱石の文について書くと云われて見るに、にわかに思い出されるのは、前に一度読んだことのある「坊ちゃん」である。読んだ時、何んともいえない快い痛快な氣持を味わつたことを覚えてゐる。そのように思い出してみると、どうしてももう一度坊ちゃんを見ようという氣になつた。もう一度痛快さを味わいたい。何といつても、あのさっぱりした江戸つ子氣質と、愛すべき無鉄砲さを曲つたことの嫌いな一直線さ、純真さ、威勢の良い閉けつばなしの性格を軽快な、うま味のある文章で書かれてゐるので快い響を私の心に与えてくれる。

主人公の一直線さと、曲りくねつた世間人の裏のあるやり口との衝突とを描いてゐる。主人公がそれらに屈せずと思つ



たことをどしどしやり通し、思つたことをどしどし云うことは、私が引こみ思案で遠慮しがちなところからまつたく痛快きわまりない。読んでいてすつと快感さを覺えた。「坊ちゃん」の第一行No.1「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」という書き出しが好きである。これにより最後まで読まなければ、済まされない氣持になる。まさしく彼は無鉄砲で損ばかりしている。友達に「いくら威張つても二階から飛び降りられまい」と云われると前後もわきまえずに飛び降りてしまふ。これから見てもいかに主人公の性格が考えは深くないが、江戸つ子丸出しの單純で一本氣であるということがわかる。それ等は、彼自身損をするが讀者には非常に痛快に響くのである。この坊ちゃんを取り巻いて清と云う彼の小間使、赴任先の先生などが、それぞれ違つた性格で面白い。清は、坊ちゃんの小間使であるが封建的な主従關係をこえて親子にも似た愛情で結びついてゐる。父親も見放しているような乱暴者坊ちゃんをひどく可愛がる。物質的にも精神的にも母親のように愛している。そのくせ勉強する兄は色ばかり白くて役にたたないと思つてゐる。坊ちゃんが後に四国へ赴任して行く時なども親同様、いやそれ以上に心配したことでもいかに坊ちゃんを愛していたかわかる。

まだ清について書くこともあるが、この位にして、赴任先のことを書く。まず校長であるがこれは、勿体ぶつて、えらそうなことをべらべらしやべつて裏を持つ出来物である。坊ちゃんがこれに煙とあだ名をつけたのは傑作である。校長は皆そうであるが、この校長も式などの時に、勿体ぶつていろいろ長々と説いて生徒を退屈させ、そして法外な要求をする。この時は新任教官に向つて要求するのだが、それを聞いた坊ちゃんがおつしやる通りには出来ませんと云つておおいに校

長をへこましてゐる。誠に痛快きわまりない。それに比べて教頭は、赤シャツを着ていて坊ちゃんに赤シャツとあだ名を附けられてゐるが、これはまた坊ちゃんとは正反對な裏の裏まで持つてゐるような人物である。それをうわべに出さず、女のようにこせこせとしてゐて、裏の方で皆を穴に陥れ入ると云うまつたく世間のすみにも置けないような人物である。坊ちゃんもこれに少なからず參つてゐる。それに似ていつも赤シャツと同意するやつに野だがいる。これも一癖ある赤シャツに似た人物である。その他こで主要な役割を演ずる人に堀田がいる。これは坊ちゃんに似てゐて、なんでもかくだでなくずけずけ云つてしまふ。初対面で礼儀を知らない、ずけずけしたやつたので山嵐というあだ名を附けられてゐる。山嵐と坊ちゃん二人で最後の方で赤シャツと野だをやつてゐるところは読んでいても痛快である。さてこのような色々変つた性格の人々が出て、正直一本氣の坊ちゃん、なんでもかくだでない山嵐と赤シャツ野だの裏表両方備えた世渡り上手との衝突が描かれてゐる。世間は一般に赤シャツの類が多く、坊ちゃんのような正直ものは馬鹿を見るのが世の中の規則でもあるように世間人は思つてゐる。しかし、そのようなものに憶せず正義を信じて、どこまでも明けつばなしの性格まる出しで赤シャツ・野だを相手はどしどしやつていく。地位、報酬にも目もくれず世間の裏と戦つてゐる。誠に痛快・うれしい限りである。これが前にも書いたように、うまい文章でかかれてゐるので坊ちゃん性格を良く出して面白い。このような世の中は、いつの時代もかわらないものである。いろいろと発展してきた今日でさえ、取り除かれてゐない。このように現代の世相によくマツチしてゐるのも又我々の興味をそそるものだと云える。しかし結局は世渡り上手ずは上役の御氣様をとり、要領よく

立ちまわるのが立身出世する道である。これも生活保持のためにはしようがないである。そういうと正直一本気な者は確かに馬鹿を見るようにとれるが、それもよいと思う。いつも正直でうそをつかず、坊ちゃんのように損ばかりしていてもそれには後暗いところがないから、どこでも誰に憶るところなく堂々と世の中が渡れる。私もこのようになりたいと思つてゐる。しかし坊ちゃんのように無鉄砲で、あまり考えもせずに一直線では、今日の世相では暮していくことが出来ないと思つて少々心配である。これらの中間を行くのがよいと思つて出来れば私はそうしたい。しかし、そんなことは別問題として私はここで非常に痛快さを味わつた。その痛快さを味わうだけで良いと思つてゐる。くさくさしたことの嫌いな一本気な、そして威勢のよい明けつばなしの性格、無鉄砲さ、純真な性格を大いに愛し、そしてこの書を楽しみに見たと云うだけで非常に満足してゐる。

風と共に去りぬを讀んで

一D 谷原康彦

「風と共に去りぬ」は、ただ面白いという一語につくる。この小説が、初版半年の間に百万部も売れたということもなるほどとすける。元来アメリカからはあまりいい小説や、いい作家が出ていないのであるが、ト・ホーソンや、アーヴィング、バーン・バック等の例外はあるが、M・ミッチェルは異色を放つ偉大な女流作家であるといえる。彼女の作品は、後にも先きにもこれ一編しかないのであるが、その一

編で売り出したとは実に偉大である。「風と共に去りぬ」とは、いわば彼女自身を指しているようなもので、我が国の樋口一葉女史と似てゐると思ふ。そう思つてみるとミッチェルと一葉との作風はよく似てゐる。一葉の代表作「たけくらべ」と「風と共に去りぬ」とは、同じ少女の淡い恋物語をテーマにしたものである。もつともこの「風と共に去りぬ」の方は少々ヒロインも年令的に大きいし、又がむしやうに生きて行こうとする意気にもみえる。こんなところが日本とアメリカの国民性のちがうところなのかもしれない。

同じアメリカの作者でも、バーン・バックとミッチェルではその作風が全然ちがう。バックは陰性で消極的なところがあるが、ミッチェルの方は華麗で筆のタッチも大胆に力強くズバリズバリと無駄なく筋を發展させてゐる。とかく外国文学は無駄な言葉を多く使い、まわりくどく同じことをなんべんもくり返し説明してゐるものが多いのであるが、この小説においてはそんなことがなく、読みやすく、意識的に効果をねらつたところがないのでとても面白く、一気に読んでしまつた。

又全編を通じてユーモアが流れていて、思わず声を立てて笑つたところも二、三ヶ所あつた。とにかく婆やのママミの性格描写は面白く、読んでゐるうちにその婆やのことがいろいろと頭に浮んでくる。そのうち特に面白いと思つたのは、大農場主に使われている奴隷でありながら、奴隷をもつていない白人を彼等の主人が馬鹿にするように、奴隷達も「白人のクズ」といつて馬鹿にしているのは面白い。それから所々に描かれてゐる南部ジョージア州の一面に見渡すかぎり咲き誇る棉花畑、南部娘の情熱を象徴するような強烈な陽光、悠々と豊かな水をたたえて流れるミシシッピ河等を鮮かに読者に感じさせる。又その

周囲に生活する南部人の生活を美しく尙且効果的に描いてゐる。とりわけこの小説のヒロイン、スカレット・オハラの子供としての感情の動き、時々爆発させる爛漫玉や、利巧すぎて悪智恵のよく働く働き方等はよく描写されている。スカレットとメラニー、アシニレット、この対立する四人の性格が南北戦争という大きな舞台を背景にして、からみあい、もつれあい、理想と現実の間をたえず往き来する。そういった巧みな性格描写や、筋の發展の自然さ、流暢さを快いテンポと場面転換の美しさをもつて描いてゐる。

又、戦争の場面、南軍の心臓に当るアトランタの軍需工場を始め、司令本部、陸軍病院や、南軍の必勝を夢見て日夜働く人々等、まるで目に見えるように描いてゐる。

この小説は、いくぶん反奴隷解放的なところがある。北軍の勝利によつて奴隷解放は行われたが、さて解放されてみて、始めて旧主人の有難さがわかつて帰つてゆく黒人達や、その黒人達になにもしてやれなかつた北軍のおろかさ、結局は奴隷を解放したヤンキーよりも奴隷制度に賛成してゐた南部人の方が彼等を愛してゐたと作者はいつてゐる。

これに反してストウ夫人の「アンクル・トムズ・ケビン」は聖書的で悲劇的である。私もよくこれをよんで泣いたものだつた。同じ奴隷を主題にしてもそれと同じく女流作家が全々ことなつた物語を書いたということも対照的で面白い。

この小説においてはあの有名な人道主義者のリンカーンもある意味においては嘲笑されてゐるようなものである。結局「いかにして生きるべきか」を真剣に考えるように作られた作品であつて、こんなところも実利的で資本主義の国アメリカらしい。

感じやすい年頃のスカレットが、その裕富な家庭において、何んの苦勞もしらず、只遊び暮して来たが、その快樂の世界から一歩足をふみ出して別の世界にみたのは、強食弱肉の世界であつた。良家のお嬢様であつたスカレットが、虚実の世界においていかに雄々しく生きてゐたか、又バトラーのスカレットに対する野生的な恋が彼女をどうさせたのかも知れない。私はこの世に生をうけたかぎり、がむしやうに生きてはならないと思つた。永遠の幸福をねがうより、一時的な快樂を追いかける方がはるかに楽しいものだということも感じた。我々の生活というものには瞬間々々の連続である。いつ死ぬかわからない。だから若いうちから信心をしるという人もいるかもしれないが、しかし、考え方によるとそんなことをしてゐるひまがない。神や仏はお互いの中に見い出せばよいのであつて、どうしても祭壇の前にぬかずいて祈る必要のあるものではない。適当に楽しみ、適当に苦しむ、適当に悲しめばよい。だから私はこれから永い人生を面白くすごそうと思ふ。そのためにこの「風と共に去りぬ」は座右録としていつももつていたい。そして時々よんで一人馬鹿みたいに笑つてゐると思ふ。



幸福と愛

二A 八木 沢 幸 平

自分の嘗て読んだ本の中で一番考えさせられた本は何かときかれ
たならばきつとヘッセの「母にかへる」と答えるであらう。この本の
中の内容は、母の願いで、すべての人間から愛される運命にある男の
子が、何をしようか人からはよく思われて青年になった時、自分に愛
想が付き、その原因は他人に対する愛の不足であるとして、今度は彼
自身から「他人を愛する」様に願いをかけ、他人が何を自分にしよう
と愛の眼で人を見、愛の手で人に觸れて以前得られなかった真の幸福
を発見するというすじである。

幸福とは何か、これは心の安静だと自分は考える。では安静を得る
には、この話の主人公の様に人に愛されて心の静まりを得られるとは
決して云えぬ。その裏には自己嫌悪というものが必ず存在する。その
自己嫌悪を乗り越きつて初めて真の心の安静を得る事の可能性が湧いて
くる。従つて他人の愛ばかり受けて、かんじんの自分に対する目分自
身の愛を受けられなかった彼にとつては不幸である筈だ。

次いで彼が苦しみ悩んだ挙句に何を発見したか。それは他人に対す
る愛を得て不幸を除く事であつた。そして彼はそれによつて、成功
し、彼を真の幸福に導いたのであつた。確かに他人に対する愛を欠い
て居る僕自身にとつて見れば、この本の読後に考えられたものが多か
つた事は当然であつたし、又大いに反省もさせられた。

今の世の中に於いて、やはり人間相互の愛の欠乏を発見する（自分

もその一人であるが）。人間の幸福の為の政策の為か、最近はいろい
ろの何々主義というものがあらわれている。そして一層世間を暗くす
る。何々主義の中でスケールの大規模なものは民主主義、共産主義で
あつて、よく衝突をする。（共産主義は個々を認めずして大部を認め
る方法らしい）。衝突する場合必ず血が流れ、人が大抵死ぬ。メーデ
1事件等は一番よい例である。兇器を持つて相互に傷つけ合い、相
手に對して愛どころか、極端な憎悪を發見させていた彼らが幸福に飢
えていたのである。果して個々に対して愛を持たなかつたのに、人間
全体に対する愛というものが持てるかどうか、それは絶対に不可能な
事である。個々に対して持つ愛より全体に対して持つ愛の方が、ずつ
と手に得る事は難かしい。なぜなれば個々の愛を悉く集めて初めて全
体の愛となるからだ。結局愛なしの幸福の有りよう筈はないのだ。今
の世間にしても、何の何主義が天下をとろうと治めようと、愛なくし
て人間を幸福にする事は又絶対に不可能な事である。幸福発見の手段
を主義とか何とかにとる事よりも、人が自分々々の内から革新を試み
なければならぬのではないか。將來の世界の幸福はこの革新に全く
かかっているのではなからうか。この点が反省すべき一番大きな点で
はなからうか。



＝創作＝

秋（假題）

三A 福 沢 淑 子

久しぶりに接した本当の田園風景に、私は心の中までがひろびろと
なるように感じた。

戦争集団疎開がいやで、知人の紹介で、それまで全く知らなかつ
たこの家に世話になつてから、終戦後も、年に一回は遊びに来ては泊
つて帰るほどずつと親しくしている家である。疎開している時は、夫
婦と、私より二つ大きくてその時中学に通つていた男の子が一人、そ
れに奥さんの弟が一人、私を入れて五人であつたが、今はその息子さ
んは、通学のためにU市の知人の所に下宿していて三人暮しである。
奥さんの弟さんが「義兄さん」「姉さん」と云うので、私も「お兄さ
ん」「姉さん」と云わせられ、今でもそれで通つている親しさであ
る。お兄さん達はこの辺ではめずらしい会社勤めで、片手間に一寸し
た菜園をやり、市場に出したりしているのであつた。屋間はお姉さん
一人であつた。

ある午後のことである。姉はふと裏のたんば道を通りかかった人に
声をかけた。

「エイさん、お茶が入っているよ」

「ああ」

ひくい折戸をあけてもそりと入つて来た男を見ると、洗いざらした
本綿織のは、んてんの前を合せてい、ちびのつるでしほり、下には、これ
も洗いざらしのカーキ色がすつかりあせてしまつた野良はきはいて
いる。

「何を取つて来たね。あれ、栗かね、へえ、まだこんなに落ちていた
かね」

男が肩から下したし、よい、ごの中を見ると、もう殆んど茶色の、口を
あけた、が、ばかりの中に、まだ緑色の消えきらないのが二つ、三つま
ざつて豊穡である。

「ずい分取つたねえ」

「みんな栗やあねえで……」

「そう……。落葉かきかね」

「ああ」

「帰りに少し置いて行くやいね」

「ああ」

その男は、頭に捻つてまいていた手拭をといて、肩のあたりのごみ
をはらい、縁に腰を下した。

「まだ稲は始まらないのかね」

「ああ」

男は無愛想に「ああ」を繰返して、さされたお茶を無感動にのみ、いかにも田舎らしいお茶受けのたくあんの部厚に切られたのを、かりかりと良い音をたてて食べるのである。

「作さんところや、昨日、もう刈つてるよだったよ」

「……………」

「たのみに行かなかつたのかねえ、あそこは今、下の兄さんが学校の寄宿へ入つちやつたんだけど……………」

「明日から行くだ」

「そら、するとだんだん忙しくなるね」

「……………」

むつとりとして、この男は何か聞かれた時にしか声を出さない。それも極く簡単に「ああ」とか「うん」とかだけである。

「エイさんにもお嫁さんを世話してやりたいと思つてゐるんだよ」

冗談半分に姉がからかうと、エイさんは、流石に少し赤くなつて、しかし調子だけは相変らず無愛想に

「うん」

と答えるのである。

姉はその筈に「ふふふ」と笑いながら

「エイさんだから、かわいくて、うんと働く人がいいよ、ね」

「……………」

ますます赤くなつてエイさんは黙つてゐる。その内

「また来るで」

とし、い、い、をかついでふいと折戸から出ていつてしまった。

「おこつたんぢやない？」

私はこの遠慮のない会話に、いさゝか驚いたので、心配になつてさう云つた。

「大丈夫よ、あの人は、ふふ」

「たれ、あの……………」

「わが、それのところが水車小屋の裏にゐるのよ」

と、その縁側を片付けてゐる時、ふとその折戸から入つて来た人を見ると、今出ていつたばかりのエイさんである。

「おや、何か忘れたの？」

「いんね、あのう、何か入れ物あるかね」

「入れ物つて……………」

再び、い、い、をを下し始めた彼を見て、姉はさう云つた。

「冗談だつたのに、いいのかね」

そして、今かたづけたばかりの盆から、茶受けの漬物と煮しめを下して

「では少し……………」

エイさんは、い、い、の中から、ごつごつとまたさうな両手で、いのがの栗をすくい出した。

「もういいだよ、なくなつちやうぢやない」

と、姉が栗であふれた盆を少しひつこめると、栗がごろごろと縁の上へ転つた。

「おばあさんに持つてつて上げなくてはいけないに……………」

「家にはまだあるで……………」

こういつて、エイさんは全部出してしまふと

「じゃ、又寄るで」

と、またそれを背負い上げた。

「わるいねえ、こんなにもらつて」

しかしエイさんはもう柴戸の外であつた。

「おもしろい人ね。私、本当におこつたのではないかと思つたわ」

縁にころがつたいがぐりは、どうしても盆の上に乗り切らなかつた。

「ゆでまじようか。この栗は小粒だけど甘くておいしいのよ」

と、姉は云つた。そして、私が問いたげにしているのをみて、説明をしてくれるのであつた。

「あの人はね。もと、水車小屋の番をしてゐただけど……………」

と、姉の語るところによると、エイさんは、今はもう誰も使わないで朽ちかけてゐる水車小屋の裏というより、その水車小屋の中にたつた一人で住んでいて、親類とはなく、前はその水車の番をしていたのだが、五年程前に、村の共同組合でモーターを買ひ、山のきわの方に小屋を作つてそこに据えつけたため、今は農家の仕事の手伝いに日雇いに出るだけが彼の渡世術である。

「モーターの番はエイさんぢや、あぶないつていうわけだつたらしいのよ」

と、姉は云つた。

水車小屋のすぐ近くに、エイ坊の子供の時から知つてゐるというおばあさんがいて、このおばあさんは、一人娘に「むこ」を取つてやる心算だつたが、二、三年前、娘が好んで自分から近村の農家に嫁に行つてしまつてから、おじいさんが死に、今はたまにその娘が、米等を持つてやつて来るが全く一人ぼつちで、すっかりエイさんの収入に頼つてゐると云うのである。

「エイや、エイやつて、とつても可愛がつてゐるという話しよ。御飯やお洗濯なんかをこまめに、みんなやつてゐるらしいのよ」

「エイ……………」

「それがね、誰も知らないの。栄助とでもいうんでしようね、そのおばあさんも知らないらしいの」

「……………」

「家じや稲もしてゐないし、あの人を頼むことつてないんだけど、前を通ると、何となく呼ばずにいられないの」

さういつて、この主婦は一寸淋しく笑つた。お餅をついたり、おはきを作つたりした時にはお重に入れて、とどけてやるのだということであつた。

私は、縁側から、これもあのエイさんが作つたかもしれない大きなわら草履をはいて庭に降り、柴の折戸を出た。

そろそろ空は暮れかけ、ひきしまつた秋のながめが、だんだん斜めになつて来る光の中に豊かであつた。

もう、お兄さん達も帰つて来るころであつた。なんとなく冷い風を感じつつ庭に入ると縁のふみ石のわきに、いかにくるまつた栗が一つ茶色の影のかたまりのように見えた。エイさんがい、い、ごの中から出す時にころがり落ちたものに違いない。私はそれを拾ひあげて、中から顔を出している栗のつややかな肌に、傾きかけた赤みのある光を映してみた。そして、ふつと「お嫁さんを……………」と云われた時赤くなつたエイさんを思ひうかべた。様々としたエイさんであつたが、赤くなつて、どもつてゐるエイさんでもあつた。

姉は、バチバチという炭の上で栗をゆでてゐるらしかつた。



二作 創二

晩秋

一A 石塚千秋

武蔵野の静けさは、初秋の風も日の陽光も薄く疎な木の梢を揺る。空で舞の木の葉は秋の日と交り合い自然の素朴な芸術となり、地上に落ちる木の葉は黄色に変わり、日溜りを求めて池の淵に黄色い影を落す。

木の葉の運命も夏子の十七迄の人生も、一寸の狂いもなく果てしなく狭く長い道を、お互いに歩んで来た業に思われた。

自然の世界の木の梢から先を競いつつ、表になり裏になりして落ちて来た木の葉、地上で行く行くは庭の片隅に集められ、燃やされてしまふことも知らず。

時には風に吹き叩かれ、目的の場所に落ちずに水溜りに我が身を浸してしまふ事もある。全く静寂としたこの自然は約束を破る事を知らない。春は若芽が蟻の壊した赤土をグググと持ち上げ、小さな力も日光を浴びる事が出来る。垣根の根本は窮屈そうに咲く名もない草に、心ある者はそつと頬づけをする。

夏は夏で、強烈な陽に輝くばかりの海がひらけ、人間一人の淋しさを季節の身体で包んでしまふ。人々は情熱的な夏と云う。

秋ノ秋ノ銀杏の葉が、松林に通つてゐるアスファルトの道の隅つこ

に集まる。風が吹けば、今迄隅つこで黙つていた木の葉も躍動し始める。道の左側から踊り出す。右側からも。廻る、廻る、廻る、廻る、廻る、廻る。風のやむ。道の真中は白く、両側には黄色くカーテンの裾模様となる。

秋の詩は、数える事が出来ない程ある。万葉時代から現在迄、所有国の詩人達がロマンチックな秋の詩に表わしている。夏子は良く詩を作る。どんなものでもよく、誰にも見せず一人手帳に心を記す。夏子は三木露風の詩を、今は亡き従兄の武志に聞かせた事がある。

秋の入江の日はさびし

風はさやさや輝やけど

波はよるよる見ゆれども

暮れの心の切にして

あし間の鳥のしば鳴くか

秋の入江の日は淋し。

此の様な静かな秋も、台風が訪れればひととき乱れる。しかしそれも治まると單調な秋の日に戻る。

木枯しが強く窓を叩き、あらゆるものが冷く手に觸れ、やがて銀世

界となつて自然の約束は果されて行く。

夏子にも、この自然の様に変わることがあつたが、決して墓へ戻る事がなく常に他の方向へ流れて行く。彼女の日記も——、思い出せば川の様に流れて止まる事を知らないのだ。

夏子には従兄の武志があつた。

そう——。こんな淋しい秋も終りの十一月——。

——あの時夏子は十五位だつたらうか——。

——武志もまだ大学で元気に勉強していた——。

夏子は武志とよく色々の事を論じ合つた。或る時は道ばたで、或る時は畑のあぜ道で恋愛論などが始まる事は数知れないことであつた。その癖、後で淋しさのこみ上げて来る時、彼女はどのような事も出来なかつた。

日は眩しく初冬には珍しい日だつた。夏子は勉強前のひと時を庭の落葉を掃いていた。後から後から落ちて来る木の葉を輝もしく思う程氣持の晴々する日だつた。

どこから吹き始めたか、冷い風が落葉を舞い上らせた。彼女はしばらくそれを眺めていた。

と、廊下の電話がリンと静けさを破つた。が、彼女は身動きもしなかつた。なおも電話は鳴り響いていた。ベタベタと廊下に足音がした。

「二雄兄さんかしら」

「へえ、ほんとですか？何時？……はあ……」

後はシーンとした静けさに戻つた。

風がいよいよ強くなり、素足は冷く薄日は消されそうになりながらガラス戸のガタガタなる音に合せていた。

「夏子、お前、武志君の家へ行つてごらん」

夏子にはもうすべてが判つてゐる様に思われた。

何かしら暗い感じのする病室。胸がつかえて、声を出すと悪魔の来る様な氣配。沈黙している皆の顔——。武志さんの顔。あんなに元氣だつた武志さんがこんな顔もやせ、手は細くなつてゐる。現実であるうか。若し、これが現実であるならば何と云つたらいいんだらう。夏子は一人迷つていた。

「夏ちゃんかい。よく来たね。彼女のあんなに手は、武志の細く白くなつた手を感じた。不二子伯母さんはハンカチを顔にあてたまま、

「夏子さん、もう——」。後は何も聞く事は出来なかつた。彼女にはこの空氣がたまらなく息苦しかつた。武志さんは何故こんな所にいるんだらう。早く逃げないのかしら？。二人であんなに歩いたのに。その——。去年の秋だつたか、愛妻家であつた父様も孤独を求めて長野の山に入つてしまつて、自分の好きな小説や詩を書いて余生を静かに過している。お父様が病氣にでもなると夏子と武志は父のもとに呼ばれた。

そんな時バスにも乗らず、湯田中から釜淵迄一時間半の道を、二人でリュックを背負い歩いてゐた。白樺の林も、山も、丸池のアヒル達も、二人には慰めとなり楽しく細いバス通路を登つた。時にはバスが二人の横を或いは前を、白い砂ぼこりを立てて通る事も、一時間半も歩く二人には珍しくない程である。

山の秋は肌寒い。寒さが増せば手はちぎれそうになり、其処此処に出てゐる白樺の切り株につまづく。

上に登つて行くにしたがつて、天氣の良い日には白馬、駒ヶ岳、槍ヶ岳のアルプスが、一つの雲の様に連なつてゐる。富士山を逆にした

様に、上からは下が一望のうちに眺められる。

「夏ちゃんは今いくつかな」

「何回聞くの」

「ああ、何回かな」

「十五です」夏子はこう胸をはって答えるのが常であつた。
「早いなあ、もう十五か。昔のことを夏つちやんは忘れないでいるかなあ。あの水戸での生活を。終戦後水戸はどんなになつたんだろうなあ。まだ夏つちやんが小学生の三年生位の時、学校から帰つて来ると汚れた両手を出して、何かくんろ何かくんろと、おばさんにねだつていた。あの時は食糧が充分でなくて、東京者のおばさんは毎日ぬかを食べていた。ぬか饅頭を二つもらつて、夏つちやんは喜んでいた。あんな時の夏ちゃんが一番かわいかつた。夏ちゃんが大きくなると何だかもうつたない様な気がする」と、いつもこれが武志さんの口ぐせの様に夏子には思える。

山道はけわしく、下から吹き上げる風は木枯しと変り雪の降りそうな空となる。武志さんはそんな時夏子の後を登る。

「それがこんなに――」

松林がざわさわと揺れる冷い夜。武志さんは、武志さんらしく静かに、私から現実の世からも別れを告げた。

十一月も終る頃。

外へ出ると夜気が顔にあたり、ひりひりとする。

「泣いたのかしら」涙が流れる。手の甲にぱとりと落ちる。風は夏子の頭上ではえている。松林が左右にゆれる。

「家へ帰らなければ」

「私には判らない」

「武志さんの死を、判り易く自分に教えてやらなければ――」
「お前の愛する者は、もう此の世にはいないのだよ――」と。



職員及び卒業生住所録

職名 氏名 住所

校長 沢野次郎
教諭 成田武雄

菅原真静

松下富美子

玉置文子

弓家田芳子

高田俊文

宗内昭春

山田律

室岡美和

今井弘

大和久鈴江

佐藤登志

石井健吉

前田惟義

関平長治

中平長治

宗像弘吉

森田英子

職名

氏名

住所

所

事務

講師

教諭

生徒

三

A

上田富士夫

江本正弘

荻山保二

乙骨淳一

梯重弘

片山重弘

加藤剛

川合敏明

河東森二郎

木村恒雄

林大内洲洋

高橋節

服部松太郎

畑中茂

青山圭吉

木内五郎

徳嵩千代子

石原日出男

湯原二郎

生徒

三

A

上田富士夫

江本正弘

荻山保二

乙骨淳一

梯重弘

片山重弘

加藤剛

川合敏明

河東森二郎

木村恒雄

// //

遠田種子
大江和子
太田幸子
沖野きよ子
荻野益世
鏡智子
春日井美江
梶雅子
金井澄子
川本弘子
朽津マチ子
小菅瑞江
小林富佐子
小宮山邦子
小山齊子
指喜代子
佐藤八重子
下瀧はる子
信賀敏子
菅井敏子
杉本歌子
鈴木清子
鈴木久子
高垣恒子
高橋靖子

運動具の御用は

千代田区西神田
引道会ビル内

久松屋

TEL (33) 4135

寫眞はいつもの

小 梶 寫 眞 店

遠足のは割引

サービスを致します

// // // // // // // // // // // // // // // //

塚趣由貴子
中川玲子
畑圭子
母壁三千代
林美公子
平出宏子
藤井澄子
藤原幸子
松井セツ子
宮原さち子
森戸美江子
門田幸子
吉田セツ子
吉野幸子
山田ちさと
山本文子

// //

岩田弘子	伊藤俊子	増田浩志	横田孝一	山本道夫	山崎富之助	光武敏士	間辺務	堀内利秋	福田裕一	野中一郎	野内一	中林璋吉	中島康光	德永二郎	手塚次雄	立石正雄	竹本友彦	杉山博	神保吉法	新玉光平	佐々木洋	齋藤育夫	小森谷英夫	金岡基
------	------	------	------	------	-------	------	-----	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	-------	-----

〃 〃 〃 〃 〃 〃 ≡
B

遠藤佐登子
熊井章子
小松弓利子
島方礼子
田中朝子
田中八重子
菅野昌子
布川多恵子
豊田敏子
中村満枝
藤林喜代子
丸山恭子
村上千枝子
安田米子
山上基子
福澤淑子
仲秀子
秋田稻子
秋元菊江
足立博子
荒川和子
石田映子
石森幸子
岩崎セツ子

…光と音の店…

前田電気商会

電燈・電気器具

内線工事

新刊圖書・雑誌参考

近藤書店

松沢小・学・前

雪華堂のお菓子

一度御風味下さい

松沢小・学・前

菓子舗 雪華堂

頭の疲れを直す 薬は
体の疲れを直す

ミスズ薬局へ

京王線下高井戸駅前

TEL (32) 0 1 7 2

松高制服・制帽指定店

文化生活に是非

新しいケーキ

美味しいパンを

下高井戸

プリンス洋服店

中村屋

る・く・ー・る・第二號 (非賣品)

昭和二八年三月一日印刷・発行

編集兼発行者 東京都立松原高等学校生徒会文化委員会

責任者 馬場 裕

発行所 東京都世田谷区上北沢一丁目二九番地

都立松原高等学校生徒会

印刷所 東京都北区中十条二ノ二二・庵原印刷株式会社

お そ ば は

日之出屋で

松沢小・学・校・前

和洋紙・事務用・學用品文具

紙大場紙店

都立松原高校教科書販賣所

下高井戸駅前

編集後記

○第二期工事の落成を目の前にし、又、三年生の次の段階への輝かしい門出を前にして、この「る・く・ー・る」もどうやら発刊する事が出来た。

今回は非常に多くの原稿が集り、編集の方では嬉しい悲鳴をあげた次第、だが残念なことに、予算の不足に依る財政難で、とにかく一万八千円足らずでやらねばならなかった。その為御覽の通り非常に頁数の少ないものとなってしまったが、その点は御諒承願いたい。

又、今回わざわざ投稿して下さいにもかかわらず、掲載出来なかつた人に対しては非常に申し訳ないが、次回に奮って御協力される様御願ひする。

○今回は編集に当り、出来るだけ生徒自身でやる様に努力した。そのため、不なれの点もあり、なかなか思う様にはかどらなかつたが、一頁一頁と、眠つてを切つたりはいたりしてどうやら出来上つた次第である。

○次に作品の整理に当り感じた事は、仮名使のミス、又は漢字の誤字が多いと云う事である。又、原稿用紙に書く以上は正しく書いてもらいたいと思う。

○本紙は本校唯一の文芸雑誌である。文化委員会が成立して約二年「松影」とこの「る・く・ー・る」を發行して来たが、これらの編集發行に際し感じた事を述べてみよう。

それは先ず「松影」の様な生徒会や学校の機関紙的な雑誌はともかく、この様な文芸雑誌を發行すると云う仕事は、今の文化委員会に適任かどうかである。この様な雑誌を、より能率的に編集發行するためには、同好の士の集いであるクラブなり他の適当な機関に於て行なつた方がよいと思う。

文化委員会という機関が「松影」や「る・く・ー・る」の編集のみを対称としたのかどうかその様な事は、根本的問題である規約問題に遡及ぶであらう。従つてこの「る・く・ー・る」のために、又生徒全体のために、より能率的な規約が欲しいものだ。

○今年ももうすぐ三月、三年生の卒業も間近に迫つた。卒業生の皆さんは新しい世界の門出に、いろいろ思いを馳せて居られる事だらう。

送別に際して、多彩の行事がくまれていると思うが、文化委員会として卒業なさる方々に、この「る・く・ー・る」をささやかな花むけをしたい。

○未筆ながら、今回本誌の發行に際し御協力下さつた校長先生始め諸先生、又生徒の皆様にも厚く感謝する。

第二号「る・く・ー・る」編集の任を終るに当り、この「る・く・ー・る」の華々しい発展を心から期待する。

(二月十四日・馬場記)

東京都立松原高等学校
生徒会
文化委員会